

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 373 集

大清水遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

おおしきみず 大清水遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する岩手県には、縄文時代の遺跡をはじめとする多くの埋蔵文化財包蔵地があり、その数は10,500箇所以上にものぼることが確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えてゆくことは、私達県民に課せられた重大な責務であります。

その一方で私達は、地域開発にともない社会資本が充実することによって、豊かで便利な生活を享受し、郷土が発展し続けることも切実に願っております。

このように、埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、胆沢ダム建設工事に関連して平成12年度に行われた調査結果をまとめたものであります。

大清水遺跡は、奥羽山脈の袂である胆沢川沿いの河岸段丘に位置する遺跡であります。調査の結果、陥し穴をはじめとする各種の遺構が検出され、縄文時代の土器、石器などの遺物も出土いたしました。当地域における歴史を解明する上で貴重な資料を提供することができたと考えております。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所、胆沢町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成13年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 村上勝治

例 言

1. 本書は、岩手県胆沢郡胆沢町若柳字慶存ほかに所在する大清水遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 大清水遺跡の岩手県遺跡台帳登録番号は NE22-2289、調査略号は OS-00 である。
3. 本遺跡の発掘調査は、胆沢ダム建設工事に伴い、国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。
4. 野外調査期間、調査面積ならびに調査を行った者は以下のとおりである。

平成 12 年(2000年) 4 月 18 日～11 月 22 日 9,120 m² 佐藤淳一・鈴木 聡・工藤 徹・斎藤麻紀子
調査面積について当初予定は 14,500 m² であり、予定通り野外調査を進めた。ところが、遺跡を東西に横断している町道の下にも遺構が確認されたため、道路分も調査を行うことになり、結局 14,790 m² が調査面積となった。野外における実質的な調査期間については、大清水 14,790 m² が 4 月 18 日～10 月 17 日、大清水上が 9 月 13 日～11 月 17 日までとなり、精査・実測を終了したのち大清水遺跡分の削ぎ取った町道の復元を行い、野外調査の一切を終了したのが 11 月 22 日である。その後、室内に戻り整理作業を開始したところで岩手県教育委員会事務局文化課から遺跡範囲の変更文書が入り(平成 12 年 12 月 26 日付 教文 1145 号)、隣接する大清水上遺跡と本遺跡の遺跡範囲が変更となった。その結果、大清水上遺跡の調査面積は野外調査における 4,960 m² から 10,630 m² へと変更になり、本遺跡は 14,790 m² から 9,120 m² へと変更になった。結局、変更となった 9,120 m² 分の実質的な調査期間(掘掘り・精査・実測等の期間)は 4 月 18 日～6 月 29 日までである。

遺構・遺物に関しては、室内に戻ってから整理作業過程において該当遺跡名の変更を行った。

5. 室内整理期間、担当者は以下のとおりである。
平成 12 年(2000年) 11 月 1 日～平成 13 年(2001年) 3 月 30 日 佐藤淳一
6. 野外での遺構写真撮影は調査員、遺物写真撮影は当センター写真技師村田慈鴻・福土昭夫が担当した。
7. 本書の執筆・編集・校正はすべて佐藤淳一が担当した。
8. 野外調査にあたり国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所、胆沢町教育委員会の御協力をいただいた。

9. 委託業務は以下の方々、機関に依頼した(敬称略)。

石器の石質鑑定：花崗岩研究会 炭化材樹種同定：早坂松次郎(岩手県木炭協会)

航空写真：東邦航空株式会社 基準点測量：株式会社協進測量設計

10. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々の御指導、御協力をいただいた(順不同、敬称略)。

稲野裕介(北上市埋蔵文化財センター) 稲野彰子(いろは写真) 小岩直人(富士大学)

11. 野外調査にあたり、以下の方々に作業員として参加していただき、ご協力いただいた(順不同)。

千田辰郎 菅原勝利 渡辺勝治 加藤源作 佐々木 清 後藤晴喜 蜂谷勝子 大槻章子 高橋春子
佐々木祐子 村上松子 千田トリノ 佐々木アエ子 渡辺マサ子 加藤ヨミ 安倍ミヨ子 高橋トシ子
安倍清子 渡辺スズヨ 柴田サヨ 佐々木カオヨ 高橋キヨ子 高木トキ子 氏家富士子 安倍幸子
高橋ミサ子 安倍アイ子 鈴木アエ子 屋上美雪 小野寺キミヨ 佐々木ヨシ子 千田きみ子 加藤タケ
千葉キクミ 菅原タキ子 高橋チエ子 高橋 宏 高橋ミヤ子 千田トシ子 佐々木幸夫 五嶋ツネ子

菅原 備 千葉光夫 小野寺禎男 千葉 明 阿部悦郎 阿部和枝 千田英子 及川キワ 及川セツ子
菊地俱子 高橋タエ子 及川正子 小野寺光子 阿部ミツ 佐々木キミ子 岩淵洋子 菅原アサ子
岩淵 洋 高橋ヨシ子 石川敦子

12. 室内整理担当作業員は以下のとおりである（順不同）。

藤村裕子 浅沼直美 齊藤美津子 後藤幸夫 越場満子 原田みなこ 阿部奈緒美 鈴木雅子
藤沢洋子 館澤京子

13. 本遺跡の出土遺物、記録類は岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

1. 遺構図の用例は下記による。

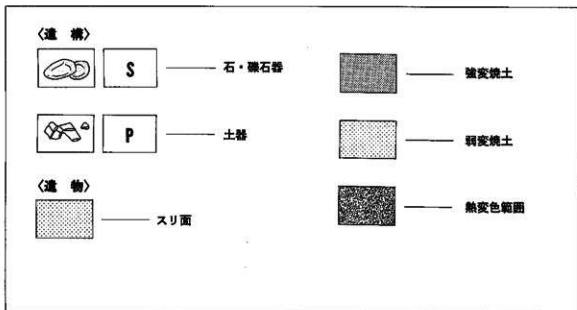
- (1) 遺構実測図の縮尺は基本的には竪穴住居状、土坑、陥し穴、焼土とも1/40、竪穴住居状の柱穴断面が1/20である。
- (2) 遺構上端、下端等の推定線は破線で表した。
- (3) 層名は基本土層にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。
- (4) 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
- (5) 断面図中の罫を「S」の略号で示した。同様に土器を「P」で示した。
- (6) 図中ないし表中の番号で取り上げた遺物は、基本的に床面ないしは床面直上の出土である。
- (7) 焼土の強弱は熱変色の程度で区分し、スクリーントーンを使い分けた。
- (8) 遺構図に使用したスクリーントーン等の用例は下図に示した。

2. 遺物実測図の用例は下記による。

- (1) 縮尺は礫石器のうち、石皿は1/4、土器・礫石器が1/3、剥片石器は1/2を基本とした。
- (2) 剥片石器における付着物については黒ヌリで範囲を示した。
- (3) 遺物図に使用したスクリーントーン等の用例は下図に示した。

3. 写真図版の用例は下記による。

- (1) 遺物写真図版における遺物番号は実測図の番号と同一である。
- (2) 各遺物の縮尺については土器・礫石器を1/3、剥片・剥片石器は2/3とした。



目次

序
例言
凡例

[本文]

I. 調査に至る経過	1	(1) 石鏃	43
II. 遺跡の立地と環境		(2) 尖頭器	44
1. 位置・立地	2	(3) 石匙	44
2. 基本層序と検出・出土状況	3	(4) 石鏃	44
3. 周辺の遺跡	3	(5) 不定形石器	44
III. 調査・整理の方法と経過		(6) 使用痕ある剥片	44
1. 野外調査		(7) 石核	44
(1) 調査区の設定	10	(8) 剥片	44
(2) 粗掘、検出、精査	11	(9) 磨製石器	45
(3) 実測、写真撮影	11	(10) 凹石、スリ石類	45
(4) 遺構名	11	(11) 石皿	45
2. 調査経過	11	VI. 考察	
3. 室内整理と報告書の作成		1. 遺構	
(1) 遺構図面	12	(1) 竪穴住居状遺構	59
(2) 遺物	13	(2) 土坑	59
IV. 検出された遺構		(3) 陥し穴状遺構	59
1. 竪穴住居状遺構	14	(4) 焼土遺構	60
2. 土坑	14	2. 遺物	
3. 陥し穴状遺構	20	(1) 出土土器について	61
4. 焼土遺構	22	(2) 出土土器について	61
V. 出土した遺物		3. まとめ	
1. 土器		(1) 遺構・遺物の特徴	61
(1) 遺構内出土の土器	43	(2) 遺跡の全体像	62
(2) 遺構外出土の土器	43	VII. 付編	
2. 石器		大清水遺跡出土火山灰の分析・鑑定	85

[挿 図]

第1図	遺跡周辺地形分類図	2	第17図	4・5号陥し穴	40
第2図	基本層序模式図	3	第18図	6・7号陥し穴	41
第3図	遺跡位置図	4	第19図	1～3号焼土	42
第4図	調査区周辺の地形	5	第20図	4～6号焼土	43
第5図	遺構配置図	6	第21図	遺構内・遺構外出土遺物(1)	51
第6図	周辺の遺跡	9	第22図	遺構外出土遺物(2)	52
第7図	グリッド配置図	10	第23図	遺構外出土遺物(3)	53
第8図	1号住居状	31	第24図	遺構外出土遺物(4)	54
第9図	1～3号土坑	32	第25図	遺構外出土遺物(5)	55
第10図	4～7号土坑	33	第26図	遺構外出土遺物(6)	56
第11図	8・9号土坑	34	第27図	遺構外出土遺物(7)	57
第12図	10・11号土坑	35	第28図	遺構外出土遺物(8)	58
第13図	12・13号土坑	36	第29図	遺構外出土遺物(9)	59
第14図	14・15号土坑	37	第30図	陥し穴状遺構の形態分類	64
第15図	16～19号土坑	38	図1(付編)	火山ガラス屈折率	95
第16図	1～3号陥し穴	39			

[表]

第1表	周辺の遺跡	7	第4表	剥片・剥片石器観察表	57
第2表	土坑観察表	24	第5表	礫石器観察表	58
第3表	土器観察表	56			

[写真図版]

写真図版1	(カラー)遺跡遺景・調査区近景	69	写真図版14	2～5号焼土	82
写真図版2	(カラー)作業風景・調査終了後	70	写真図版15	5・6号焼土・遺物出土状況	83
写真図版3	調査前風景・基本土層	71	写真図版16	遺構内・遺構外出土遺物(1)	84
写真図版4	1号住居状	72	写真図版17	遺構外出土遺物(2)	85
写真図版5	1～4号土坑	73	写真図版18	遺構外出土遺物(3)	86
写真図版6	5～8号土坑	74	写真図版19	遺構外出土遺物(4)	87
写真図版7	9～11号土坑	75	写真図版20	遺構外出土遺物(5)	88
写真図版8	12～15号土坑	76	写真図版21	遺構外出土遺物(6)	89
写真図版9	16～19号土坑	77	写真図版22	遺構外出土遺物(7)	90
写真図版10	1・2号陥し穴	78	図版1(付編)	大清水遺跡のテフラ	95
写真図版11	3・4号陥し穴	79			
写真図版12	5・6号陥し穴	80			
写真図版13	7号陥し穴・1号焼土	81			

I. 調査に至る経過

大清水遺跡は「胆沢ダム建設事業」に伴って、その事業区域内（コア採取地）に位置することから発掘調査を実施することとなったものである。

胆沢ダムは、北上川右支川の胆沢川に建設される高さ132m、長さ745m、総貯水量1億4,300万㎡の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的は、洪水調節・河川環境保全等のための流水確保・灌漑用水・水道用水・水力発電を行う多目的ダムで、平成2年5月11日に「胆沢ダム建設に関する基本計画」が官報告示され今日に至っている。

埋蔵文化財の取扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省新石淵ダム調査事務所（昭和63年4月胆沢ダム工事事務所と名称変更）から、ダム事業区域内における埋蔵文化財の有無の照会が岩手県教育委員会に出され、周知地区864,000㎡、可能性有地区490,000㎡が確認された。その後、水没面積（4,400千㎡）を含む事業地内における埋蔵文化財の包蔵地の取扱いについて、毎年度各工事等の実施に先だって、岩手県教育委員会と協議を行いながら計画的に調査を実施しているところである。

大清水遺跡については、平成11年6月4日付建東胆工第73号により胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼がなされた。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成11年9月30日～31日・10月4日の3日間にわたり試掘調査を実施し、その結果トレンチ24ヶ所から縄文土器等が検出され遺構が存在する可能性が高いことが判明したため、平成11年10月21日付教文第745号で発掘調査が必要である旨胆沢ダム工事事務所へ回答された。

これに基づき両者が協議を行い、消滅する遺跡について事前に発掘調査を実施することとし、発掘調査事業については財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

II. 遺跡の立地と環境

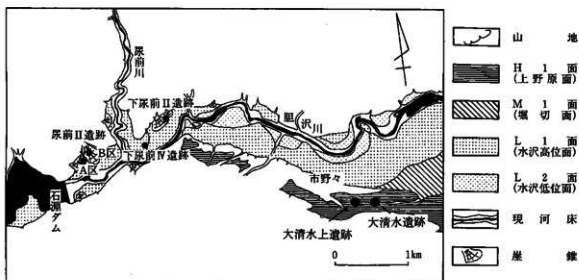
1. 位置・立地

大清水遺跡は胆沢町胆沢町若柳字慶存ほか、J R東北本線水沢駅から西へ約 20 km、馬留地区から市野々地区をかなめとして東方に広がる胆沢扇状地のほぼ扇頂部に位置する。

遺跡の所在する胆沢町は岩手県の南西部に位置する。西方には奥羽山脈が広がり北西には換石岳 (1,547 m)、西から南西にかけては笹森山 (1,085 m)、桑原山 (1,126 m)、大薮山 (1,165 m) が望まれ、東方には胆沢川によって形成された胆沢扇状地が広がる。面積は 297.7 ㎡で、北は金ヶ崎町、東是水沢市、南は前沢町、衣川村、一関市、西は秋田県東成瀬村に接している。1955 (昭和 30) 年に南部田・若柳・小山の 3 村が合併し 1967 (昭和 42) 年に町制が施行された。1617 (元和 3) 年に遡る寿庵塚や、茂井羅塚などの灌漑事業によってはじめられた扇状地面の開拓は、1953 (昭和 28) 年の石澗ダムの完成によりさらに進められ、治水機能の整備された現在では、エグネ (屋敷林) とキヅマ (木材を重ねてつくった垣根) を有する家屋に象徴される典型的な散村形態を示す集落景観のもと、県内有数の米作地帯となっている。

東北地方の脊梁をなす奥羽山脈は、中新世以降のグリーンタフ変動によって形成され、新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山脈で、現在でも活動している火山が多い。形成期が比較的新しいため、この山脈に源をもつ北上川の西側支流に多量の土砂を供給し、中流域西岸においては、胆沢扇状地をはじめとする大小の堆積地形が発達し、広い平野部を形成している。

大清水遺跡は胆沢川により形成された高位段丘である上野原段丘上に立地する。胆沢川の形成した河岸段丘については、水河性海面変動ならびに各段丘面に堆積したテフラの分析を基軸とした形成年代の特定がある程度なされており、およそ古い順に高位段丘 (14 万年～45 万年前に形成)、中位段丘 (5 万年～9 万年前に形成)、低位段丘 (2 万年～3000 年前に形成) という分類がなされている。これらはさらに高位から T1



第1図 遺跡周辺地形分類図

(大歩面)、T2 (一首坂面)、T3 (西根面)、H1 (上野原面)、H2 (横道面)、M1 (廻切面)、M2 (福原面)、L1 (水沢高位置)、L2 (水沢低位置) の9面に細分される。(大上・吉田 1984)。本遺跡の位置する上野原段丘は形成年代の古い高位段丘の中にあつて大歩段丘、一首坂段丘、西根段丘に次いで古い段丘との見方がなされており、今から約15～20万年前に形成されたとされる(渡辺 1991)。遺跡の標高は約260m～270mで西から東に向かってゆるやかに高度を減ずる。調査区は段丘崖に隣接した台地で、中央付近から北方に向かいゆるやかな谷状地形が確認される。遺跡の位置は北緯39度6分、東経140度57分である。

2. 基本層序と検出・出土状況

基本層序は以下に示したようように区分される。場所により土層の厚さは異なるが、調査区南側の尾根状地形部分は概して薄く、北側の谷頭地形に向かうにつれて厚くなっている。

I層 黒褐色土層(表土)。層厚5～20cm。

表土。腐葉土を主体とし、草木の根が繁茂する。

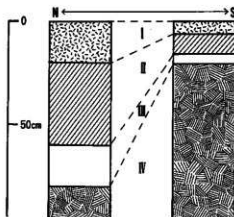
II層 黒褐色土層。層厚10～40cm。

尾根上などでは薄い堆積となり、I層との判別が難しい。縄文時代の遺物を含む層である。

III層 褐色土層。層厚5～20cm。II層とIV層の漸移層的な土層。上部はII層と、下部はIV層との漸移層的な土層である。

上部に縄文時代の遺物を含む。この層が遺構の最終検出面である。

IV層 黄褐色粘土質シルト層(地山)。



第2図 基本土層模式図

3. 周辺の遺跡

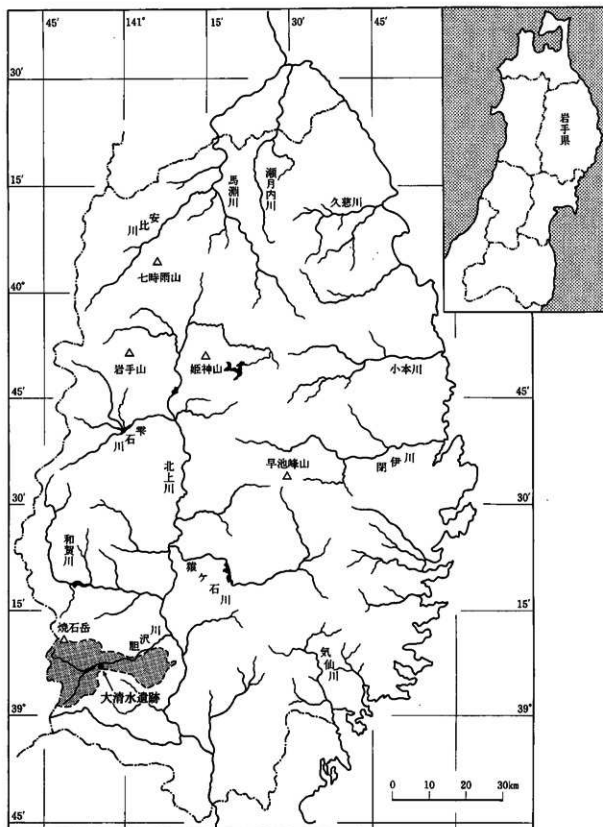
岩手県教育委員会文化課による平成11年度遺跡登録台帳によると、胆沢町では現在171遺跡が確認されており、旧石器時代から中世・近世にいたるまで多数の遺跡が存在する。ここでは町内の主な遺跡について、時代を追って概観してみることにする。

旧石器時代の遺跡としては上秋森遺跡かみあきもりがあげられる。昭和50年～52年にかけて計3回の発掘調査がなされた。ナイフ型石器、彫刻刀型石器、スクレイパーなどが出土しており、いずれも後期旧石器時代に相当する。下部のIIb文化層は前半期～中葉期に位置づけられる。このほか山の神遺跡から石刃、上佐布遺跡から尖頭器が出土している。

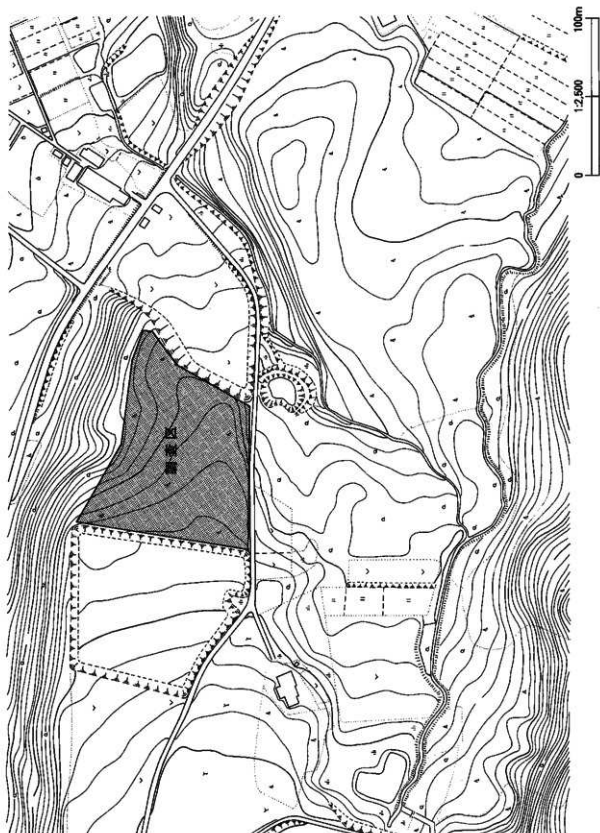
縄文時代の遺跡は胆沢町全体の約8割を占め、沖積面を除く各段丘面上に分布する。草創期に位置づけられる遺跡は確認されていないが、下原前IV遺跡しもはらのまえから小瀬ヶ沢型に類似する有舌尖頭器が2点出土している。

早期に相当すると思われる遺跡は比較的多く、各遺跡から土器破片が出土している。発掘調査の行われた遺跡としては尼板遺跡にいたがあり、貝殻条痕文、貝殻沈線文、縄文・条痕文、縄文・縄文期の各住居跡が検出されている。

前期の遺跡では、芦の尾遺跡あしのおにおいて前葉期の住居跡群、浅野遺跡あさのからは末葉期の住居跡が検出されている。また、本遺跡の隣に位置する大清水上遺跡は昭和58～59年に胆沢町教育委員会、平成12年には当埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われ、後葉～末葉(大木5～6式)の大形住居跡を主体とする住居跡群が検出されている。

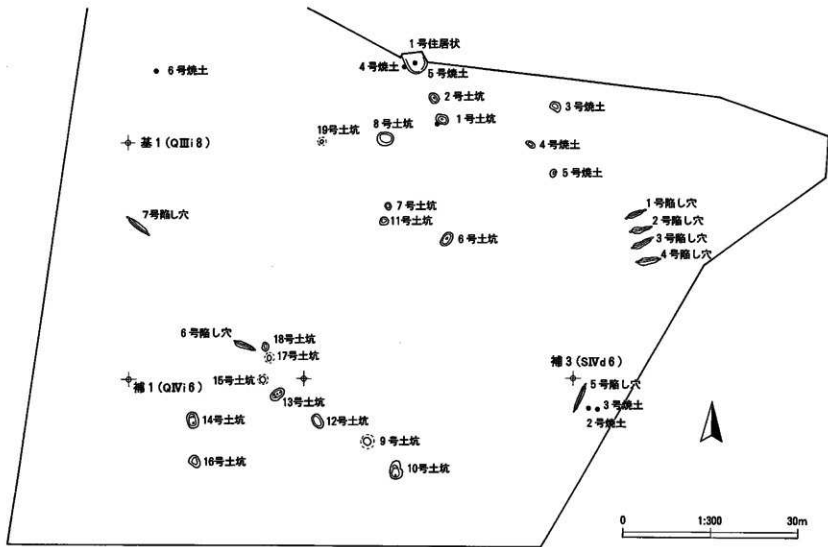


第3圖 遺跡位置圖



第4図 調査区周辺の地形

第5区 埋藏区図



中期の遺跡では宮沢原遺跡群があり、前葉～末葉（大木 7a～10 式）にわたる住居跡が多数検出されている。このうち、宮沢原 A・E・B 東遺跡における大木 9～10 式の住居跡では、「上原式複式炉」と呼ばれる土器埋設石囲部と石敷き石組部からなる複式炉をもつものが多く、時期性、地域性を含め注目に値する。

後期になると遺跡の多くはこれまでよりも低い段丘面に分布するようになる。原前 II A 遺跡および下原前 II 遺跡からは前葉～中葉に位置づけられる可能性をもつ住居跡などが検出されている。また、宮沢原 C 遺跡からは門前式期の人面付き土器が発見され、宮沢原 D 遺跡からは初頭期（門前式期）の可能性のある立石を伴う土坑が検出されている。

晩期の遺跡では後葉期（大洞 A 式）の墓墳と炉跡が検出されている南中沢遺跡がある。そのほか赤剥遺跡、合野遺跡などからこの時期に該当する土器片が出土している。

弥生時代については、遺物の出土例はみられるものの、遺跡の調査例はない。しかし、昭和 52 年に清水下遺跡から灌漑用水の工事中に石包丁 2 個が、県内では初めて発見された。このことは当該時期にこの地方において、確実に稲作が行われていた証明となった。

古墳時代では、県内で最大最古の古墳であるとともに、埴輪を伴う国内最北端の前方後円墳である角塚古墳があり、国の指定史跡となっている。造営時期は 5 世紀末～6 世紀初頭と考えられており、周辺部には角塚古墳の北方約 2 km の位置に中平入遺跡がある。時期は 5 世紀～7 世紀頃で、5 世紀後半と推定される濠で囲まれた方形区画や住居跡が検出された。遺物はほぼ同時期と推定される古式須恵器の甕と坏のほか、大量の黒曜石が出土している。

奈良・平安時代では、8 世紀代の遺跡として沢田遺跡、要香遺跡等が、9 世紀以降の遺跡としては宇南田遺跡、十文字遺跡等から住居跡が検出されている。

中世・近世の城館跡は 9 ヶ所登録されている。このうち柏山氏の家臣高橋盛富の居館との伝承がある鹿合館は、本丸（主郭部）と物見台（出郭部）から構成される典型的な山城である。調査により主郭部から空堀、土塁、掘立建物跡等の遺構が検出され、小札、鏝等の鉄製品や陶磁器類が出土している。

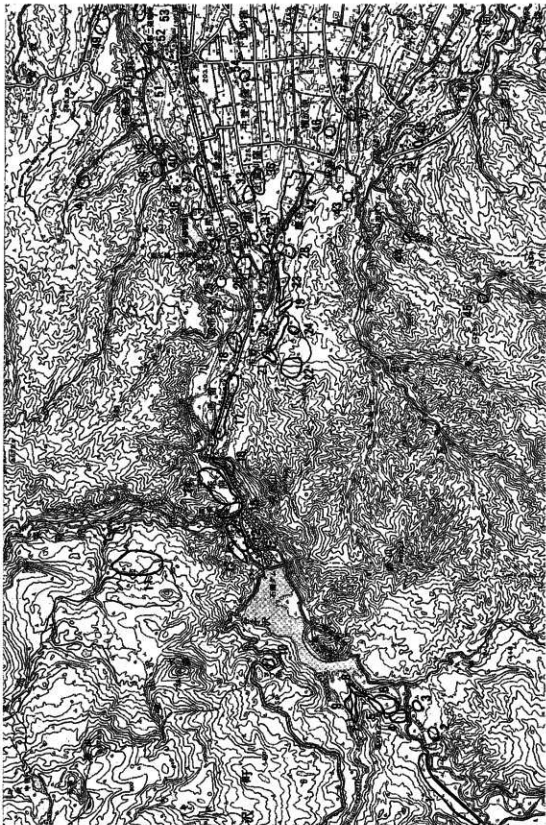
第 1 表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代・備考
1	大平野 I	散布地	縄文 土器
2	平根原 I	散布地	縄文 土器
3	平根原 II	散布地	縄文 土器
4	坪洲 I	散布地	縄文 土器
5	坪洲 II	散布地	縄文 土器（中期）
6	坪洲 III	散布地	縄文 土器
7	下嵐江 I	散布地	縄文 土器（晩期） 雑 独鈷石
8	下嵐江 II	散布地	縄文 土器
9	下嵐江 III	散布地	縄文 土器
10	谷子沢	散布地	縄文 土器
11	蜂谷	散布地	縄文 土器 石器
12	原前 I	散布地	縄文 土器 石器
13	原前 II	集落跡	縄文 土器（早・前・後・晩期） 石器 住居跡 土坑
14	下原前 I	集落跡	縄文 住居跡（中・後期） 土坑 土器（早～晩期） 石器ほか
15	下原前 II	散布地	縄文/弥生 縄文土器（早・前期） 有舌尖頭器 弥生土器
16	穴山塚跡	用水路	近世 取水口
17	馬留	散布地	縄文 土器
18	市野々	集落跡	縄文/平安 縄文住居跡（後・晩期） 平安住居跡

19	なめだけⅠ	散布地	縄文 土器
20	なめだけⅡ	散布地	縄文 土器
21	なめだけⅢ	散布地	縄文 土器
22	僧寺	散布地	縄文 土器
23	大清水上	集落跡	縄文 住居跡(前期) 土器(前期) 石器
24	大清水上Ⅱ	散布地	縄文 土器
25	猿の鼻館(栄の花館)	城館跡	近世 二郭 空堀 土塁
26	宮坂	散布地	縄文 土器(後期) 石鏃
27	横沢原	散布地	縄文 土器
28	大清水	狩場	縄文 土器(早・前・後・晩期) 石器
29	林虎	散布地	縄文 土器
30	三本柳	散布地	縄文 土器(後・晩期) 土偶
31	横沢原Ⅱ	散布地	縄文 土器
32	横沢原Ⅲ	散布地	縄文 土器
33	横沢原Ⅳ	散布地	縄文 土器
34	宮沢原Ⅱ	散布地	縄文 土器
35	雲刈窪Ⅱ	散布地	縄文 土器
36	萩袋	散布地	縄文/平安 土器(晩期) 土偶 土師器
37	上愛宕原	散布地	縄文/弥生 縄文土器
38	鹿合館(山鹿館)	城館跡	中世末 空堀 掘立柱建物跡 小札 陶磁器
39	南中沢	散布地	縄文 土器(後・晩期) 石鏃 石匙 石棒 石斧
40	上舞合	集落跡	縄文 土器
41	岳山	散布地	縄文/古代 縄文土器(後・晩期) 古代土師器
42	上横沢原	散布地	縄文 土器(後・晩期) 土偶
43	上萩森	散布地	旧石器 ナイフ形石器 スクレイパー 石核
44	松山寺	寺院跡	中世 石垣
45	小谷館	城館跡	中世
46	萩森北	散布地	縄文 土器(前・中期) 石斧 飾具
47	前萩森	散布地	縄文 土器(前・中期) 石斧 飾具
48	大平	散布地	縄文 土器
49	中山	散布地	縄文 土器(中・晩期)
50	下鹿合東	散布地	縄文 土器(晩期)
51	下鹿合東Ⅱ	散布地	縄文 土器
52	かどっしょ	散布地	縄文/古代 縄文土器 古代土師器
53	門ヶ城	城館跡	中世 三郭
54	雲刈窪	散布地	縄文 土器(前期) 石匙 石斧 石鏃 尖頭器 石剣
55	宮沢原成沢	散布地	縄文 土器(前・中期) 石匙 石斧

<引用・参考文献(Ⅱ章)>

- 胆沢町 1971.『胆沢町史Ⅰ 原始古代編』
- 岩手県教育委員会 1999.「岩手県文化財包蔵地一覽」
- 大上和良・吉田 光 1984.「北上川中流域、胆沢扇状地における火山灰層序」岩手大学工学部研究報告 37:69-80.
- 小原真一 2000.『尿前Ⅱ遺跡B地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第343集.
- 斎藤孝治 1983.「扇状地の形態・構造の統計分析による岩屑供給量と河床変化の時代変遷」地理学評論56-2:61-80.
- 酒井宗孝 1999.『尿前Ⅱ遺跡A地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第288集.
- 杉沢昭太郎 1997.『下尿前Ⅱ発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第252集.
- 中川久夫ほか 1963b.「北上川中流域の第四系および地形」地質学雑誌 96-811
- 渡辺潤久 1991.「北上低地帯における河成段丘面の編年および後期更新世における岩屑供給」第四紀研究 30-1:19-42.



1:50,000 礪石岳

第6図 周辺の遺跡（図中の番号は、第1表の遺跡番号と一致する）

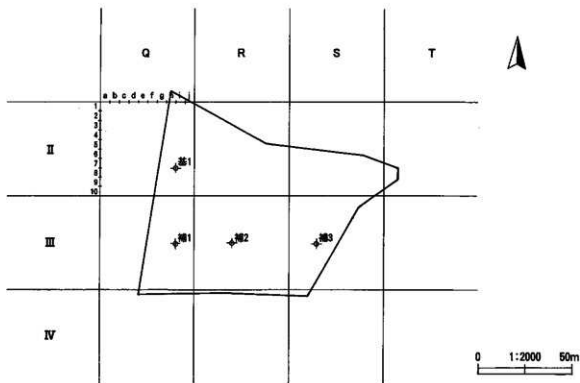
Ⅲ. 調査・整理の方法と経過

1. 野外調査

(1) 調査区の設定 (第4図・第7図)

調査範囲は胆沢川により形成された河岸段丘の段丘面上に位置する。岩手県教育委員会文化課による試掘調査および現況の地形判断等から、9,120 m²が調査区として設定された。グリッドは公共座標第X系に基づき、西から東へA・B…、北から南へI・II…となる大グリッドを設定し、さらに大グリッド内を東から西へa~jに、北から南へ1~10にそれぞれ10分割して小グリッドとした。大グリッドは50×50mを単位とし、小グリッドは5×5mが単位である。なお、このグリッド設定に関しては、隣接する大清水上遺跡との共通グリッドとした。その結果、大清水遺跡は大グリッドでQII・III・IV・V、RIII・IV・V、SIII・IV・Vグリッドの範囲が該当することになった。

基準点の国土座標は基準点1 (QIII8) で第X系X=-98785.000m、Y=10990.000m、H=271.547m、補点1でX=-98825.000m、Y=10990.000m、H=272.405m、補点2でX=-98825.000m、Y=11020.000m、H=271.475m、補点3でX=-98825.000m、Y=11065.000m、H=269.991mである。これにより、グリッドラインは東西南北の方向と合致する。



第7図 グリッド配置図

(2) 粗掘、検出、精査

検出はまず調査区に2×5mの試掘トレンチを設定し、土層の確認を行った。その後、重機（パワーショベル）により表土除去を行い、人力により順次Ⅱ～Ⅳ層まで掘り下げた。その際、調査区の面積と作業員数を考慮し、試掘トレンチにて遺構や遺物の類が一切見られなかった区域に関しては、重機で一気にⅢ層上面まで掘り下げた。また、遺物が比較的多く出土した区域（SⅢ～SⅣグリッド）では、表土から人力で掘り下げた。遺構の検出面は試掘トレンチによる断面観察の結果ではⅡ層下部で可能であるが、実際にはⅡ層と遺構覆土の区別が難しい場合があったため、Ⅲ層の漸移層上面まで掘り下げた後確認、精査を行った。精査は遺構の性格に応じ断面を設定している。ただし、土坑の一部については手違いにより断面を記録していないものがある。遺構内の遺物は床面、底面のものは平面位置を記録して取り上げ、覆土中の遺物はできるだけ層位毎に取り上げた。遺構外遺物については基本的にグリッド単位で層位毎の取り上げとした。Ⅳ層以下については、フラスコ状土坑や陥し穴のように、Ⅳ層を深く掘り込んでいる遺構の底面や壁面において、縄文時代以前の遺構や遺物が確認されなかったため、検出は省略した。

(3) 実測、写真撮影

実測は簡易遣り方、平板を併用し基本的には1/20で行い、焼土等の平面・断面等については1/10で行った。写真撮影は中判カメラ1台（白黒）、35mmカメラ2台（白黒、カラーリバーサル）を使用した。航空写真は調査の終盤段階で委託業務として行った。

(4) 遺構名

遺構名は1番から遺構種類別におもに検出順に登録した。現地で登録した遺構名は変更せずそのまま使用しているため、一部に欠番が生じている。また、登録時に遺構の種類を判断に迷う場面が生じたため（円形や楕円形のシミを陥し穴とするか土坑とするか）、基本的に溝状の細長いものを陥し穴とし、それ以外はすべて土坑で一括して登録した。したがって、土坑として登録したもののうち、陥し穴の機能を有するとおもわれるものが含まれている。

2. 調査経過

例言で述べたように、当初は大清水遺跡の調査区面積が14,500㎡、隣接する大清水上遺跡の調査区面積が4,960㎡であった。以下調査経過について述べるが、基本的に遺跡の東から西に向かって二遺跡分またがる範囲を4月下旬から11月下旬までかけて調査を進めていった。その後、野外調査終了後に遺跡の範囲変更が行われたため、最終的な調査区面積は大清水遺跡9,120㎡、大清水上遺跡10,630㎡となった。したがって、調査経過については、大清水遺跡と大清水上遺跡両方の経過を載せたほうがより調査の全体像を把握できると判断し、二遺跡分を合わせた調査の流れを記述した。本文中の遺跡名については変更後のものを使用しているが、前述のように調査終了後の変更であったため、文中にて矛盾する部分若干生じている可能性があることをつけ加えておく。

結果として見るならば、大清水遺跡としての発掘調査期間は4月18日～11月22日までであったが、実質的な野外調査期間は4月18日～6月30日までであったということである。

4月18日 機材を搬入し調査を開始する。

4月19日～27日 大清水調査区内雑物撤去（人力、重機使用）

- 4月27日 調査区北側より重機による表土除去開始。
- 5月16日 焼土、黒色のシミ等を複数検出。
- 5月19日 一部精査、実測開始。
- 6月1日 大清水上調査区内の雑物撤去を行う。
- 6月6日 粗掘り、検出終了。本格的に精査・実測に取りかかる。
- 6月12日 1～7号土坑まで精査終了。
- 6月23日 8～13号土坑、1～6号陥し穴、1～6号焼土まで精査・実測終了。
- 6月29日 1号住居伏、14～19号土坑、7号陥し穴まで精査・実測終了。大清水調査区内における調査を終了する。
- 7月3日 大清水上調査区の表土除去・検出に取りかかる。
- 7月7日 県教育委員会文化課、中村英俊主任文化財主査来跡。土量計算のデータを提示。
- 7月10日 遺跡北端付近で石器集中区を検出。
- 7月14日 101号住居検出。
- 8月1日 120号土坑まで精査・実測終了。
- 8月11日 遺跡北東部分4,560㎡の精査・実測を終了。引き続き道路南側820㎡に取りかかる。
- 8月17日 大形住居2棟検出。
- 8月24日 精査を進めるほどに住居が検出され、この区域だけで8棟以上になることが判明。
- 8月31日 遺構が町道下にまで及ぶことが判明し、道路剥ぎ取りの検討に入る。
- 9月5日 町道わき207号住居南端部にて土玉約130個がまとめて出土する。
- 9月7日 県教育委員会文化課、中村英俊主任文化財主査、胆沢ダム工事事務所、千葉和男建設専門官、埋蔵文化財センター、高橋興右衛門調査二課長立会いのもと、道路下に及ぶ遺構の処理について協議する。その結果、町道を剥がして調査する間は仮設道路を敷設して迂回させることで合意した。
- 9月11日 仮設道路敷設開始。
- 9月18日 町道下から既存の遺構の延長部分に加えて、さらに新たな遺構が検出される。
- 10月2日 鈴木聡調査員が加わる。大清水上西側部分4,960㎡の精査に取りかかる。
- 10月16日 斎藤麻紀子調査員が加わる。
- 10月17日 大清水上南東部分820㎡と道路下290㎡の調査を終了する（当初の大清水遺跡分が終了）。
- 10月18日 工藤徹調査員が加わる。
- 10月21日 現地説明会。約35名参加。
- 10月30日 終了確認（大清水・大清水上）。剥がした道路を復元することで合意。
- 11月1日 室内整理開始。野外調査と並行して整理を開始した。
- 11月13日 航空写真撮影。
- 11月14日 撤収に向け、荷造りを開始。
- 11月17日 器材梱包、トラックへ積み込み撤収する。重機による町道の復元を残すのみとなる。
- 11月22日 町道復元終了。本年度分の野外調査を終了する。

3. 室内整理と報告書の作成

(1) 遺構図面

室内整理においては、現場で記録した遺構の平面図、断面図を照合・合成し遺構図版原稿とした。また、必要に応じ、エレベーション図の作成も行った。遺構の計測値に関しては、基本的に以下の基準に基づいている。

- ①長径・短径：長径は長軸方向の上端間の最大距離、短径は長軸・長辺に直交する軸で上端間の最大の距離を計測した。
- ②壁高：上端最高部と床面（底面）最低部の差を壁高とした。ただし、周溝・柱穴等は含めていない。
- ③壁の角度：基本的には断面図における底面と壁との角度をもって壁の角度とした。表現としては角度30度未満を「緩やか」、30～45度未満を「比較的緩やか」、45～60度未満を「比較的急」、60度以上を「急」として使用している。
- ④柱穴間距離：柱痕跡の明確なものはその中心、柱痕跡が不明なものは柱穴の中心の距離を計測した。
- ⑤柱穴の深さ：上端で最も高い部分と底面の比高を計測した。
- ⑥計測値（規模：径・面積など）は、完全に把握できたものについては実数で表し、調査区域外や重複などにより部分的にした把握できなかったものについては残存値を（ ）内数値で表した。

(2) 遺物

遺物は水洗→注記→接合・復元→掲載遺物の選別→実測→トレース→写真撮影→図版原稿作成→収納といった手順で整理を行った。実測にあたっては、土器に関しては完形品の他、径を復元できる資料、立体的で採択が困難な資料を選び実測を行ったが、一部文様等を拓影で表したものもある。石器に関しては器種毎に使用面等を図化する方向で展開方法の選択を行った。

IV. 検出された遺構

1. 竪穴住居状遺構

1号住居状 (第8図 写真図版4)

<位置・検出状況>RⅢh 4~5、とRⅢi5グリッドにまたがり、調査区中央部北端付近に位置する。他の調査区に比べ若干標高が低く、谷状地形の頭部に相当する。先に覆土上部にて4号焼土・5号焼土を検出しており、これらの精査終了後にさらに掘り進めたところ、山側にて住居の壁らしき掘り込みを一部確認した。その後、柱穴と疑われるピットも数基検出されたため、住居状遺構として登録した。

<重複>覆土上部にて4号焼土・5号焼土が検出されている。

<平面形・規模>円形と推測されるプランの約2分の1を検出した。直径3.9m。

<覆土・堆積状況>自然堆積。暗褐色~黒褐色土。炭化物、焼土粒を比較的多く含む。

<壁・床面>壁と思われる掘り込みは南側(山側)の一部に残存する。緩やかに外傾して高さは15cm程度である。床面はかたくしまっており、ほぼ平坦である。

<柱穴>ピットは8基確認している。このうちピット底面のレベルなどからPit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 5、Pit 6、Pit 7をこの住居にともなう柱穴とした。検出した遺構のプランとピットの配列について見ると、それほど規則性があるようには思えない。

<炉>確認していない。

<その他の付属施設>確認していない。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

2. 土坑

人為的な掘り込みの確認される穴で、後述する溝状の平面形を有する陥し穴以外のもの、すなわち円形、楕円形等の円形基調の穴を一括して土坑とした。これらの中には貯蔵穴と思われるもの、陥し穴(円形・楕円形)、その他(墓壕など)が含まれる。

1号土坑 (第9図 写真図版5)

<位置・検出状況>RⅢi6からRⅢi7グリッドに位置する。先に検出していた1号焼土の断面を掘り進めたところ、土坑を検出した。

<重複>1号焼土と重複している。1号土坑覆土最上部が1号焼土であるため、この焼土よりも土坑の方が古い時期につくられたものと考えられる。

<平面形・規模>平面形は楕円形で、開口部190×150cm、底部154×110cm、深さは70cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒褐色土を主体とし、上部の焼土層の下にある黒褐色および暗褐色土には黄褐色土粒ならびに炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は急(60~75度)で、底面はほぼ平坦である。底面中央部付近に18×18cm、深さ32cmの規模の小穴を確認している。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

2号土坑(第9図 写真図版5)

<位置・検出状況>RⅢi6 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形はほぼ円形で、規模は開口部170×150cm、底部100×70cm、深さ70cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土を主体とし、上部から下部にわたり黄褐色土粒と炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は比較的緩やか(30～40度)で、底面は上端の規模に比べてかなり狭まる。底面中央部付近に32×20cm、深さ20cmの規模の小穴を確認している。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

3号土坑(第9図 写真図版5)

<位置・検出状況>SⅢc6 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は不整な楕円形で、規模は開口部180×100cm、底部120×40cm、深さ30cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は上部が黒褐色土、下部がにおい黄褐色土で、下部に黄褐色土ブロック中～大が混入する。

<壁・底面>壁は緩やか(20～30度)で、底面は凹凸がある。底面中央部付近を境にして両側が凹んでいる。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

4号土坑(第10図 写真図版5)

<位置・検出状況>SⅢb7～SⅢb8 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は不整な楕円形で、規模は開口部165×80cm、底部124×56cm、深さ30cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土主体で、炭化物等は混入していない。

<壁・底面>壁は比較的緩やか(30～40度)で、底面は船底状に若干の丸みを帯びている。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

5号土坑(第10図 写真図版5)

<位置・検出状況>SⅢc8～SⅢc9 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は不整な楕円形で、規模は開口部130×90cm、底部82×20cm、深さ40cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土主体で、最下部の4層に黄褐色土粒ならびに黄褐色土ブロックが混入する。

<壁・底面>壁は比較的緩やか(30～45度)で、底面は中央部に向かうほど凹むV字形である。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

6号土坑(第10図 写真図版6)

<位置・検出状況>RIVi1~RIVj1グリッドに位置する。II層下部にて検出した。黄褐色土を含む黒色土が楕円形のシミを形成していたため、土坑とした。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は楕円形で、規模は開口部226×136cm、底部170×106cm、深さ38cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色並びに黒褐色土の二つの層で構成され、いずれの層にも黄褐色土粒が混入する。

<壁・底面>壁は急(70~80度)で、底面は平坦である。底面中央部付近に30×30cm、深さ34cmの規模の小穴を確認している。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

7号土坑(第10図 写真図版6)

<位置・検出状況>RIIIg10グリッドに位置する。II層下部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は円形で、規模は開口部140×125cm、底部80×76cm、深さ40cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色~黒褐色土主体で、下部の4層と5層に黄褐色土粒が混入する。また最上部の1層は火山灰(To-a)を含む層である。

<壁・底面>壁は比較的緩やか(30~40度)で、底面中央部付近がやや凹んでいる。

<出土遺物>なし。

<時期>不明であるが覆土最上部にTo-a火山灰が堆積していることから、少なくとも915年以前には構築されていたものと考えられる。

8号土坑(第11図 写真図版6)

<位置・検出状況>RIIIg7グリッドに位置する。II層下部~III層上部にて検出した。当初は三日月状を呈する地山の盛り上がり部分に隣接するシミであったため風倒木の葉いもあったが、掘り進めるうちに土坑であることがわかった。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形はほぼ円形で、規模は開口部270×244cm、底部210×166cm、深さ116cmである。

<覆土・堆積状況>覆土は上部が黒色~黒褐色土主体で、下部に黄褐色土のシルト層が堆積する。

<壁・底面>壁は急(70~80度)で、上部がやや外傾する。底面は若干の凹凸がみられるもののほぼ平坦である。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

9号土坑 (第11図 写真図版7)

- <位置・検出状況>RIVg8 グリッドに位置する。Ⅲ層にて円形でやや褐色ぎみのシミを検出した。
- <重複>なし。
- <平面形・規模>平面形は円形で、規模は開口部 220×200 cm、底部 158×148 cm、深さ 82 cmである。
- <覆土・堆積状況>覆土は黒褐色～暗褐色シルト主体で上部から下部にかけて黄褐色土粒並びに炭化物粒が混入する。また、覆土下部に礫が混入している。
- <壁・底面>壁は上部で一旦緩やかに外傾したのち、下部に向かって内傾する。底面は壁際に若干の傾斜が認められるもののほぼ平坦である。
- <出土遺物>なし。
- <時期>不明である。

10号土坑 (第12図 写真図版7)

- <位置・検出状況>RIVh9 グリッドに位置する。Ⅲ層にて楕円形の黒いシミを検出した。
- <重複>陥し穴とフラスコが重複している可能性が考えられる。
- <平面形・規模>平面形は不整な楕円形で、規模は上端 282×218 cm、下端 229×120 cm、深さ 164 cmである。
- <覆土・堆積状況>覆土は黒褐色～暗褐色土主体で、下半部に黄褐色土粒並びに炭化物粒や焼土粒が混入する。13層以下の層を見ると、不自然な堆積状況であり人為堆積の可能性が考えられる。
- <壁・底面>壁は上部で外傾したのち急な角度(70～85度)で底面まで下がる。底面はほぼ平坦であるが、壁際に2ヶ所、径8～10 cm、深さ14 cmの小穴を確認している。
- <出土遺物>なし。
- <時期>不明である。

11号土坑 (第12図 写真図版7)

- <位置・検出状況>RⅢg10 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。
- <重複>なし。
- <平面形・規模>平面形は不整な円形で、規模は上端 126×116 cm、下端 82×78 cm、深さ 24 cmである。
- <覆土・堆積状況>覆土は黒色並びに黒褐色シルトにより構成され、2層には黄褐色土粒が混入する。
- <壁・底面>壁は比較的急(45～55度)で、底面はほぼ平坦である。掘り込みは浅い。
- <出土遺物>なし。
- <時期>不明である。

12号土坑 (第13図 写真図版8)

- <位置・検出状況>RIVe7 グリッドに位置する。Ⅲ層にて楕円形を呈する黒色のシミを検出した。
- <重複>なし。
- <平面形・規模>平面形は楕円形で、規模は上端 240×190 cm、下端 200×160 cm、深さは 20 cmである。
- <覆土・堆積状況>覆土は黒褐色土主体であり、下部の2層に黄褐色土粒と炭化物粒が混入する。
- <壁・底面>壁は急(45～60度)であるが、掘り込み自体は浅い。底面はほぼ平坦である。
- <出土遺物>なし。

<時期>不明である。

13号土坑 (第13図 写真図版8)

<位置・検出状況>RIVc6~RIVd6 グリッドに位置する。Ⅲ層にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は楕円形で、規模は上端 264×168 cm、下端 210×94 cm、深さ 150 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は暗褐色土主体で、下部は黄褐色~褐色土となる。覆土中部付近に黄褐色土粒並びに炭化物粒、また上部の5層には焼土粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で外傾したのち急な角度(70~85度)で底面まで下がる。底面はほぼ平坦であるが底面壁際に小穴を3基確認している。いずれも径6~8 cm程度で18~22 cmの深さを持つ。また、底面中央部付近には径26 cm程度、深さ6~8 cmの浅い凹みが確認される。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

14号土坑 (第14図 写真図版8)

<位置・検出状況>RIVa7 グリッドに位置する。Ⅲ層にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は楕円形で、規模は上端 286×205 cm、下端 204×100 cm、深さ 152 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は上部から黒色→褐色→暗褐色→黄褐色土という堆積状況であり、上部の層には黄褐色土粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で外傾したのち急な角度(70~85度)で底面まで下がる。底面はほぼ平坦であるが底面壁際に小穴を4基確認している。北側の壁際に3基、南側の壁際に1基である。径は8~18 cm程度で10~16 cmの深さを持つ。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

15号土坑 (第14図 写真図版8)

<位置・検出状況>RIVc5~RIVc6 グリッドに位置する。Ⅲ層下部~Ⅳ層上部にて検出した。当初はプランが明確に確認できなかったため、柱穴状土坑として掘り進めたが、のちに拡大してフラスコ状の土坑になることが判明した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は円形で、規模は上端 168×160 cm、下端 128×112 cm、深さは 120 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は暗褐色~黒褐色土主体で、上部の層に黄褐色土粒ならびに炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、内傾する。底面はほぼ平坦である。

<出土遺物>覆土上部より2、3の剥片が出土している。

<時期>不明である。

16号土坑 (第15図 写真図版9)

<位置・検出状況>RIVa8 グリッドに位置する。Ⅲ層にて検出した。平面形、覆土等の状況から、風倒木等の落ち込みに土が堆積した可能性も考えられる。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は不整形で、規模は上端 248×210 cm、下端 152×138 cm、深さ 50 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土主体であるが、2層は火山灰 (To-a) を含む層である。

<壁・底面>壁は比較的緩やか (35～40度) で、底面は凹凸がある。

<出土遺物>覆土中より1の土器、4の石器が出土している。

<時期>不明である。

17号土坑 (第15図 写真図版9)

<位置・検出状況>RIVc5 グリッドに位置する。Ⅲ層にて検出した

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は円形で、規模は上端 142×120 cm、下端 124×112 cm、深さ 76 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土主体で全体に黄褐色土粒が混入し、一部炭化物粒も入る。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、内傾する。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

18号土坑 (第15図 写真図版9)

<位置・検出状況>RIVc4 グリッドに位置する。Ⅲ層にて黒いシミを検出した。覆土に炭化物粒が混入することもあり、土坑として登録したが、平面形などを考慮すると風倒木等の可能性も考えられる。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は不整な楕円形で、規模は上端 142×84 cm、下端 70×42 cm、深さ 38 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は黒褐色土と褐色土で構成され、1層には炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は比較的緩やか (35～40度) で、底面には凹凸がある。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

19号土坑 (第15図 写真図版9)

<位置・検出状況>RIIc7 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は円形で、規模は上端 104×100 cm、下端 106×80 cm、深さは 74 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は黒褐色～暗褐色土主体で全体にわたり黄褐色土粒が混入する。また、最上部の1層には炭化物粒も入る。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、内傾する。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

3. 陥し穴状遺構

細長い溝状の平面形を呈するもので、他遺跡などにおいてTピットの名称を与えられている遺構を陥し穴状遺構として登録した。全部で7基確認している。

1号陥し穴（第16図 写真図版10）

<位置・検出状況>SⅢf10 グリッドに位置する。Ⅲ層下部～Ⅳ層上部で検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 286×66 cm、底部 330×16 cm、深さ 110 cm である。

<覆土・堆積状況>褐色～暗褐色土主体で、覆土下半の3層には炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。断面形はY字状を呈する。

<出土遺物>掲載はしていないが、極小の縄文土器片が数点出土している。

<時期>不明である。

2号陥し穴（第16図 写真図版10）

<位置・検出状況>SⅢf10～SⅣf1 グリッドに位置する。Ⅲ層下部～Ⅳ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 312×66 cm、底部 358×10 cm、深さ 112 cm である。

<覆土・堆積状況>暗褐色から黒褐色土主体で、覆土中部の3層に炭化物粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。断面形はY字状を呈する。

<出土遺物>掲載はしていないが、極小の縄文土器片が数点出土している。

<時期>不明である。

3号陥し穴（第16図 写真図版10）

<位置・検出状況>SⅣf1 グリッドに位置する。Ⅲ層下部～Ⅳ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 334×94 cm、底部 293×8 cm、深さ 108 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土上部は黒褐色～暗褐色土主体で、下部は黄褐色土主体である。最下層の7層に黒色土粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。断面形はY字状を呈する。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

4号陥し穴（第17図 写真図版11）

<位置・検出状況>SⅣd6 グリッドに位置する。Ⅲ層下部～Ⅳ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 348×86 cm、底部 332×14 cm、深さ 106 cm である。

ある。

<覆土・堆積状況>覆土上部は暗褐色～黒褐色土主体で、下部は褐色～黄褐色土主体である。上部2層に炭化物粒並びに黄褐色土粒が混入する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。断面形はV字状を呈する。

<出土遺物>6の石器（尖頭器）が出土している。

<時期>不明である。

5号陥し穴（第17図 写真図版12）

<位置・検出状況>SIVd6 グリッドに位置する。Ⅱ層下部にて検出した。前年度に行われた文化課による試掘トレンチですでに存在が判明していたものである。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 348×86 cm、底部 366×16 cm、深さは 120 cm である。

<覆土・堆積状況>黒色～黒褐色土主体で、上部2～4層には黄褐色土粒が混入する。

<壁・底面>開口部の幅は他の遺構に比べ狭く、壁は開口部からほぼ垂直に下がる。断面形はI字に近い形を呈する。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

6号陥し穴（第18図 写真図版12）

<位置・検出状況>RIVb4 から RIVc4 にかけて位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 384×88 cm、358×22 cm、深さは 128 cm である。

<覆土・堆積状況>黒褐色～暗褐色土主体である。上部にある2つの層（1層と2層）には焼土粒が混入する。また、4層は明黄褐色土に黒色土粒が混入する。断面観察および土層から判断して、覆土上部は人為堆積の可能性が高い。断面形はY字状を呈する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

7号陥し穴（第18図 写真図版13）

<位置・検出状況>QⅢi10 グリッドに位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形（溝状）で、規模は開口部 404×70 cm、底部 364×16 cm、深さ 108 cm である。

<覆土・堆積状況>覆土は黒色～黒褐色土主体で、上部の層に黄褐色土粒が混入する。断面形はY字状を呈する。

<壁・底面>壁は上部で緩やかに外傾したのち、ほぼ垂直に下がる。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

4. 焼土遺構

1号焼土 (第19図 写真図版13)

<位置・検出状況>RⅢi7 グリッドに位置する。Ⅱ層下部からにて検出した。

<重複>1号土坑と重複する。

<平面形・規模>平面形は楕円形を基調とする不整形で、規模は長径168cm、短径104cmである。

<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は赤褐色土主体で、断面による厚さは最大25cm程度である。その周囲に黒色土主体で弱い焼成を受けたと思われる部分が広がる。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

2号焼土 (第19図 写真図版14)

<位置・検出状況>SⅣd6～SⅣd7 グリッドに位置する。尾根状の地形部分に相当するため、地山上の堆積土の厚さは約10～20cm程度と極めて薄く、土層の確認が難しい場所であった。Ⅰ層の表土直下にわずかにⅡ層・Ⅲ層が堆積している。Ⅲ層にて検出した。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は円形を基調とする不整形で、規模は長径70cm、短径46cmである。

<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は褐色土主体で、断面による厚さは最大でも10cm未満と極めて薄い。

<出土遺物>ないが周辺から5の不定形石器が出土している。

<時期>不明である。

3号焼土 (第19図 写真図版14)

<位置・検出状況>SⅣd6～SⅣd7 グリッドに位置する。2号焼土に隣接して検出された。検出状況は2号焼土と同じである。

<重複>なし。

<平面形・規模>平面形は楕円形を基調とする不整形で、規模は長径90cm、短径50cmである。

<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は赤褐色土主体で、断面による厚さは最大でも10cm未満と極めて薄い。

<出土遺物>なし。

<時期>不明である。

4号焼土 (第20図 写真図版14)

<位置・検出状況>RⅢh5 グリッドに位置する。

<重複>1号住居状遺構と重複する。

<平面形・規模>平面形は円形を基調とする不整形で、規模は長径96cm、短径70cmである。
<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は橙色土で、断面による厚さは最大約10cmである。
<出土遺物>なし。
<時期>不明である。

5号焼土 (第20図 写真図版14・15)

<位置・検出状況>RⅢb5グリッドに位置する。
<重複>1号住居状遺構と重複する。
<平面形・規模>平面形は円形を基調とする不整形で、規模は長径108cm、短径96cmである。
<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は明赤褐色土で、断面による厚さは最大約15cmである。
<出土遺物>なし。
<時期>不明である。

6号焼土 (第20図 写真図版15)

<位置・検出状況>QⅢi5～QⅢj5に位置する。Ⅱ層下部～Ⅲ層にて検出した。
<重複>なし。
<平面形・規模>平面形は円形を基調とする不整形で、規模は長径96cm、短径68cmである。
<覆土・堆積状況>強い焼成を受けたと思われる部分は褐色土で、断面による厚さは最大で約12cmである。
<出土遺物>なし。
<時期>不明である。

第2表 土坑・陥し穴観察表(1)

遺構名	1号土坑	2号土坑	3号土坑
位置	RⅢi6~RⅢi7	RⅢi6	SⅢc6
図版	9	9	9
写真図版	5	5	5
検出状況 重複関係	1号焼土と重複 焼土の断面を掘りすすめたところ土坑を検出	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出
埋土	自然堆積	自然堆積	自然堆積
平面形	楕円形	円形~楕円形	不整な楕円形
規模	開口部	190×150 cm	170×150 cm
	底部	154×110 cm	100×70 cm
	深さ	70 cm	70 cm
断面、底面等の様子	壁は急(60~75度) 底面はほぼ平坦である	壁は比較的緩やか(30~40度) 底面が狭い	壁は緩やか(20~30度) 底面に2ヶ所の凹みを持つ
出土遺物			
副穴等	底面中央部に小穴1	底面中央部に小穴1	
備考	陥し穴	陥し穴	風倒木の可能性

遺構名	4号土坑	5号土坑	6号土坑
位置	SⅢb7~SⅢb8	SⅢc8~SⅢc9	RⅣi1~RⅣj1
図版	10	10	10
写真図版	5	6	6
検出状況 重複関係	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出した	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出した	Ⅱ層下部にて検出した
埋土	自然堆積	自然堆積	人為堆積
平面形	不整な楕円形	不整な楕円形	楕円形
規模	開口部	165×80 cm	130×90 cm
	底部	124×56 cm	82×20 cm
	深さ	30 cm	40 cm
断面、底面等の様子	壁は比較的緩やか(30~40度) 底面は船底状	壁は比較的緩やか(30~45度) 底面はV字状	壁は急(70~80度) 底面は平坦
出土遺物			
副穴等			底面中央部に小穴1
備考			陥し穴

第2表 土坑・陥し穴観察表(2)

遺構名	7号土坑	8号土坑	9号土坑
位 置	RⅢg10	RⅢg7	RⅣg8
図 版	10	11	11
写真図版	6	6	7
検出状況 重複関係	Ⅱ層下部にて検出	Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出	Ⅲ層にて検出
埋 土	自然堆積	自然堆積	人為堆積?
平面形	円形	ほぼ円形	円形
規 横	開口部	140×125 cm	270×244 cm
	底 部	80×76 cm	210×166 cm
	深 さ	40 cm	116 cm
断面、底面等 の様子	壁は比較的緩やか(30～40度) 底面はやや凹む	壁は急(70～80度) 上部がやや外傾 底面は平坦	壁は上部で一旦外傾したの ち下部に向かい内傾する
出土遺物			
副穴等			
備 考		陥し穴	フラスコ状土坑

遺構名	10号土坑	11号土坑	12号土坑
位 置	RⅣh9	RⅢg10	RⅣe7
図 版	12	12	13
写真図版	7	7	8
検出状況 重複関係	Ⅲ層にて検出した	Ⅱ層下部～Ⅲ層上部にて検出した	Ⅲ層にて検出した
埋 土	人為堆積? + 自然堆積	自然堆積	自然堆積
平面形	不整な楕円形	不整な円形	楕円形
規 横	開口部	282×218 cm	126×116 cm
	底 部	220×120 cm	82×78 cm
	深 さ	164 cm	24 cm
断面、底面等 の様子	壁は上部で外傾したあと急な角度(70～85度)で底面まで下がる	壁は比較的急(45～55度) 底面はほぼ平坦	壁は急(45～60度) 底面は平坦である
出土遺物			
副穴等	底面壁よりに小穴2		
備 考	陥し穴とフラスコの重複の可能性		

第2表 土坑・陥し穴観察表(3)

遺構名	13号土坑	14号土坑	15号土坑	
位置	RIVc6~d6	RIVa7	RIVc5~c6	
図版	13	14	14	
写真図版	8	8	8	
検出状況 重複関係	Ⅲ層にて検出	Ⅲ層にて検出	Ⅲ層下部~Ⅳ層上部にて検出	
埋土	自然堆積	人為堆積?+自然堆積	人為堆積	
平面形	楕円形	楕円形	円形	
規模	開口部	264×168 cm	286×205 cm	168×160 cm
	底部	210×94 cm	204×100 cm	128×112 cm
	深さ	150 cm	152 cm	120 cm
断面、底面等の様子	壁は上部で外傾したあとと急な角度(70~85度)で底面まで下がる	壁は上部で外傾したあとと急な角度(70~85度)で底面まで下がる	壁は上部で緩やかに外傾したのち内傾する	
出土遺物			石器: 2・3	
副穴等	底面壁よりに小穴3、中央部付近に浅い小穴1	底面壁よりに小穴4		
備考	陥し穴	陥し穴	フラスコ状土坑	

遺構名	16号土坑	17号土坑	18号土坑	
位置	RIVa8	RIVc5	RIVc4	
図版	15	15	15	
写真図版	9	9	9	
検出状況 重複関係	Ⅲ層にて検出	Ⅲ層にて検出	Ⅲ層にて検出	
埋土	自然堆積	人為堆積	自然堆積	
平面形	不整形	円形	不整な楕円形	
規模	開口部	248×210 cm	142×120 cm	142×84 cm
	底部	152×138 cm	124×112 cm	70×42 cm
	深さ	50 cm	76 cm	38 cm
断面、底面等の様子	壁は比較的緩やか(35~40度)底面に凹凸あり	壁は上部で緩やかに外傾したのち内傾する	壁は比較的緩やか(35~40度)底面に凹凸あり	
出土遺物	土器: 1 石器: 4			
副穴等				
備考	風倒木の可能性	フラスコ状土坑		

第2表 土坑・陥し穴観察表(4)

遺構名	19号土坑	1号陥し穴	2号陥し穴
位 置	RⅢe7	SⅢf10	SⅢf10~SⅣf1
図 版	15	16	16
写真図版	9	10	10
検出状況 重複関係	Ⅱ層下部~Ⅲ層にて検出	Ⅲ層下部にて検出	Ⅲ層下部にて検出
埋 土	人為堆積	自然堆積	自然堆積
平面形	円形	長楕円形(溝状)	長楕円形(溝状)
規 模	開口部	104×100 cm	286×66 cm
	底 部	106×80 cm	330×16 cm
	深 さ	74 cm	110 cm
断面、底面等 の様子	壁は上部で緩やかに外傾したの内傾	壁は上部で緩やかに外傾したのちほぼ垂直に下がる	壁は上部で緩やかに外傾したのちほぼ垂直に下がる
出土遺物			
副穴等	底面中央部に浅い凹み		
備 考	プラスチック土坑		

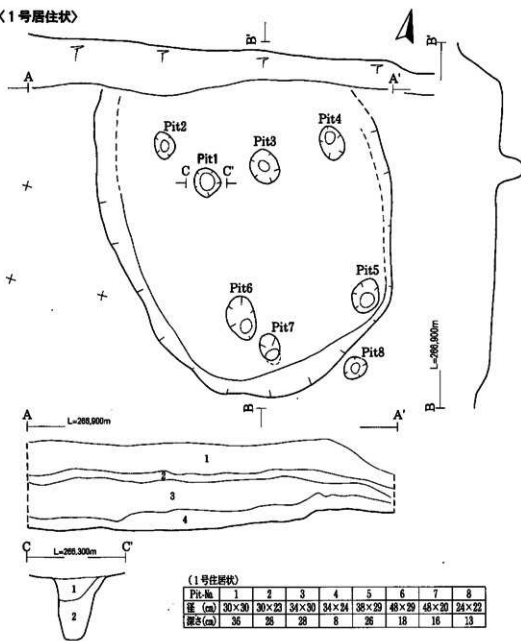
遺構名	3号陥し穴	4号陥し穴	5号陥し穴
位 置	SⅣf1	SⅣf1~SⅣg1	SⅣd6
図 版	16	17	17
写真図版	11	11	12
検出状況 重複関係	Ⅲ層下部にて検出	Ⅲ層下部にて検出	Ⅱ層下部にて検出
埋 土	自然堆積	自然堆積	自然堆積
平面形	長楕円形(溝状)	長楕円形(溝状)	長楕円形(溝状)
規 模	開口部	334×94 cm	348×86 cm
	底 部	293×8 cm	332×14 cm
	深 さ	108 cm	106 cm
断面、底面等 の様子	壁は上部で緩やかに外傾したのち垂直に下がる	壁は上部で緩やかに外傾したのちほぼ垂直に下がる	壁は上部で緩やかに外傾したのちほぼ垂直に下がる
出土遺物		石器：6	
副穴等			
備 考			

第2表 土坑・陥し穴観察表(5)

遺構名	6号陥し穴	7号陥し穴
位 置	RIVb4~RIVc4	QⅢ110
図 版	18	18
写真図版	12	13
検出状況 重複関係	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出	Ⅱ層下部~Ⅲ層上部にて検出
埋 土	自然堆積	自然堆積
平面形	長楕円形(溝状)	長楕円形(溝状)
規 模	開口部	384×88 cm
	底 部	358×22 cm
	深 さ	128 cm
断面、底面等の様子	壁は上部で緩やかに外傾したのち垂直に下がる	壁は上部で緩やかに外傾したのちはほぼ垂直に下がる
出土遺物		
副穴等		
備 考		

遺 構 図 版

〈1号居住状〉



(1号居住状)

Pit-No	1	2	3	4	5	6	7	8
径 (m)	30×30	30×23	34×30	34×24	38×29	48×29	48×20	24×22
深さ (cm)	36	26	28	6	26	18	16	13

(1号居住状)

- 7.5YR1.7/1 黒色シルト しまり弱 粘性强
- 10YR2/2 黒色シルト しまり中 粘性强
- 7.5YR2/1 黒色シルト しまり中 粘性强 黄土粒 黄土ブロック中1%未満
- 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性强-中

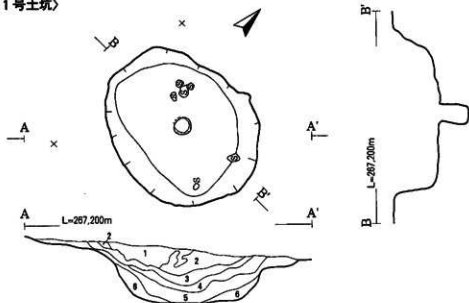
(1号居住状柱穴 C-C')

- 7.5YR2/1 黒色シルト しまり中 粘性强弱 黄褐色土粒極小1%未満 炭化物粒極小1%未満
- 10YR2/3 暗褐色シルト しまり弱 粘性强-中

0 1:40 2m

第8図 1号居住状

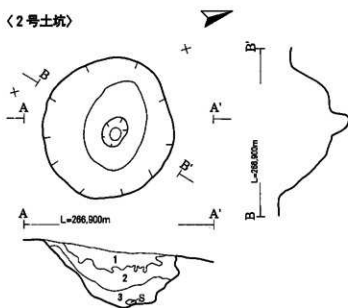
〈1号土坑〉



(1号土坑)

- | | | | | |
|-------------|--------|------|----------------|-------------------------|
| 1. 5YR4/5 | 赤褐色シルト | しまり弱 | 粘性強 | 5YR2/3 暗褐色シルトを含む |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強 (剛い塊状を受ける) | |
| 3. 10YR3/3 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 黄褐色土粒極小1% 炭化物粒極小1%未測 |
| 4. 7.5YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 | 黄褐色土粒極小3% 炭化物粒極小1%未測 |
| 5. 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 | 黄褐色土粒極小5% |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱-中 | 黄褐色土粒極小10% 黄褐色土ブロック1%未測 |

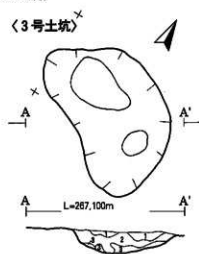
〈2号土坑〉



(2号土坑)

- | | | | |
|-------------|--------|--------|------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性強粒極小1%未測 |
| 2. 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト | しまり中~強 | 粘性強極小1%未測 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱1%未測 |

〈3号土坑〉



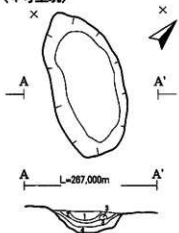
(3号土坑)

- | | | | |
|------------|--------------------|------|-------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性強 |
| 2. 10YR2/2 | 暗褐色シルト (1層よりやや明るい) | しまり中 | 年生層弱 |
| 3. 10YR5/4 | にぶい黄褐色シルト | しまり中 | 中~大含む |

0 1:40 2m

第9図 1~3号土坑

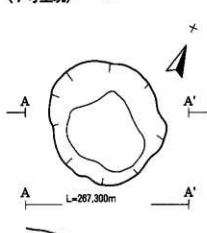
〈4号土坑〉



(4号土坑)

- | | | | |
|-------------|--------|--------|-----|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性強 |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強 |
| 3. 10YR2/3 | 暗褐色シルト | しまり中~強 | 粘性弱 |
| 4. 5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強 |

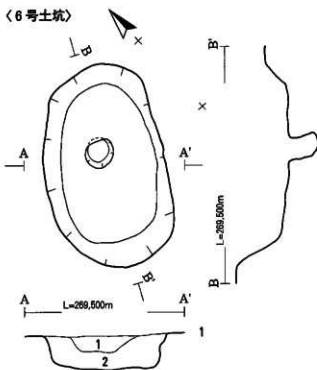
〈7号土坑〉



(7号土坑)

- | | | | |
|-------------|-------------|------|--------------------|
| 1. 10YR5/4 | にがい黄褐色砂質シルト | しまり中 | 粘性弱 (To-eと褐色土の混合土) |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 |
| 3. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 |
| 4. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性弱 黄褐色土粒極小1% |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 黄褐色土粒極小3% |

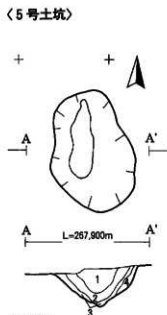
〈6号土坑〉



(6号土坑)

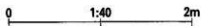
- | | | | |
|-------------|--------|------|--------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性強弱 黄褐色土粒極小1% |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 黄褐色土粒極小~小3%未満 |

〈5号土坑〉

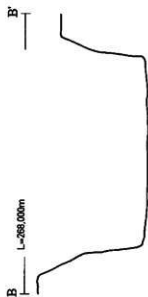
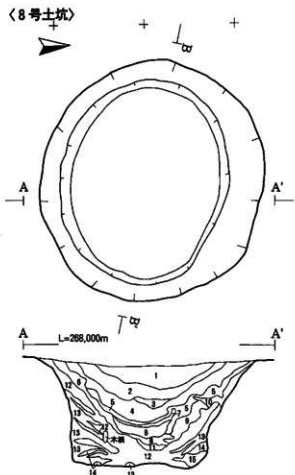


(5号土坑)

- | | | | |
|-------------|--------|--------|--------------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中~強 | 粘性強弱 |
| 2. 10YR2/3 | 暗褐色シルト | しまり弱 | 粘性強 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中~強 | 粘性弱 |
| 4. 10YR2/1 | 黒褐色シルト | しまり強 | 黄褐色土粒極小1% 黄褐色土ブロック中2ヶ所含む |



第10図 4~7号土坑

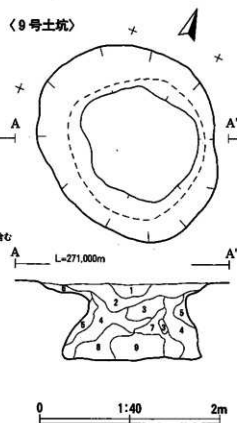


〈8号土坑〉

- | | | | | | |
|---------------|----------|--------|-------------------|---------------|--------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性強 | | |
| 2. 7.5YR1.7/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | | |
| 3. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強 | 黄褐色土粒1%未満 | 鐵土粒極小局所的に混入 |
| 4. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強 | 黄褐色土粒極小~小1%未満 | |
| 5. 10YR3/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒極小~小3% | |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり強 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒極小~小3% | |
| 7. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | しまり強 | 粘性強 | | |
| 8. 10YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒含む | |
| 9. 10YR4/6 | 褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 | | |
| 10. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 黄褐色土粒極小1%未満 | |
| 11. 10YR3/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒極小3~5% | 鐵土粒小~中局所的に含む |
| 12. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性中 | 黄褐色土粒極小~3% | |
| 13. 10YR4/6 | 褐色粘土質シルト | しまり中 | 粘性中 | | |
| 14. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強 | | |
| 15. 10YR4/6 | 褐色粘土質シルト | しまり中~強 | 粘性中~強 (12層よりやや強い) | | |

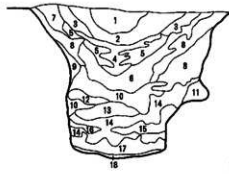
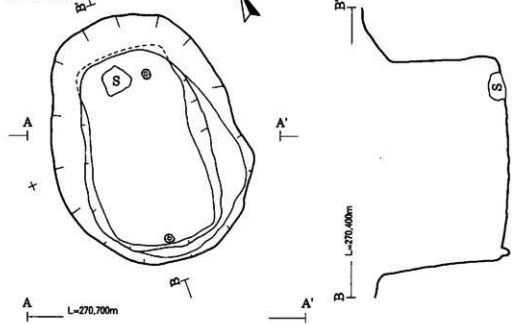
〈9号土坑〉

- | | | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------------|------------------------|-----------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | | |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 年生強弱 | 黄褐色土粒極小~小1%未満 | 炭化物極小1%未満 |
| 3. 10YR3/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒極小~3% | 炭化物極小1%未満 |
| 4. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 炭化物極小1%未満 | |
| 5. 10YR3/4 | 暗褐色粘土質シルト | しまり中 | 粘性弱~中 | 黄褐色ブロック中~大局所的に含む | |
| 6. 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 主体に10YR3/4 | 暗褐色シルトがブロック状に混入 | しまり中 | 粘性中 |
| 7. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 年生強弱 | 黄褐色土粒極小3% | |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | 黄褐色土粒極小1~2% (7層よりやや強い) | |
| 9. 10YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 | 炭化物小1%未満 | |



第11図 8・9号土坑

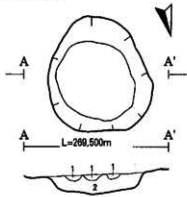
〈10号土坑〉



(10号土坑)

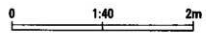
- | | | | |
|--------------|---|--------|-------------------------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱～中 | 粘性強弱 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%未満 |
| 4. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性強弱 |
| 5. 10YR2/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%未満 |
| 6. 10YR5/6 | 黄褐色シルト | しまり中～強 | 粘性弱 |
| 7. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性中 黄褐色土粒極小1%未満 (5層より中～明るい) |
| 8. 10YR3/4 | 暗褐色シルト | しまり中～強 | 粘性弱 黄褐色土粒極小～小1% |
| 9. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱～中 | 粘性弱 黄褐色土粒極小1% 炭化物極小1%未満 |
| 10. 10YR4/4 | 褐色砂質シルト | しまり中 | 粘性弱 黄褐色土粒極小1%未満 |
| 11. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 黄褐色土粒極小～小3～5% 炭化物粒極小1%未満 |
| 12. 10YR6/6 | 明黄褐色粘土質シルト | しまり中～強 | 粘性中～強 |
| 13. 10YR6/6 | 明黄褐色粘土質シルト (12層) と 10YR2/1 黒色シルトの混合土
ブロック状 (小～中) に混合 (塊め戻しか?) しまり中 | | 粘性中 |
| 14. 10YR6/6 | 明黄褐色粘土質シルト (12層) と 10YR2/1 黒色シルトの混合土 (12層より中～明るい) | | |
| 15. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性中 炭化物極小1%未満 黄褐色ブロック (10YR7/2) 1ヶ所 |
| 16. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中～強 | 粘性中 |
| 17. 10YR4/3 | こよい黄褐色粘土質シルト | しまり中～強 | 粘性中～強 黄褐色土ブロック1%未満 |
| 18. 10YR6/6 | 明黄褐色粘土質シルト | しまり中～強 | 粘性中～強 (取り戻すように硬い) |

〈11号土坑〉



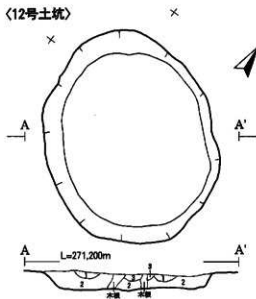
(11号土坑)

- | | | | |
|-------------|--------|------|------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり中 | 粘性強 |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり中 | 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%未満 |



第 12 図 10・11号土坑

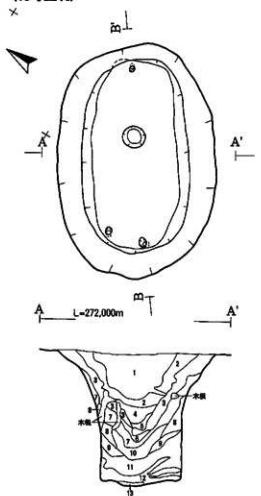
〈12号土坑〉



〔12号土坑〕

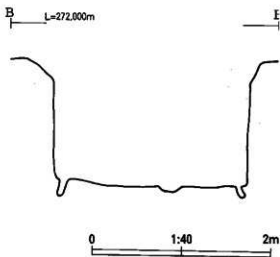
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中粘性强弱 黄褐色土粒極小1%未満
3. 7.5YR3/4 暗褐色シルト しまり中 粘性强弱 炭化物粒極小1%未満

〈13号土坑〉



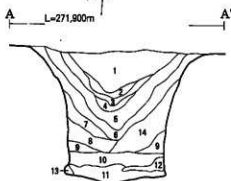
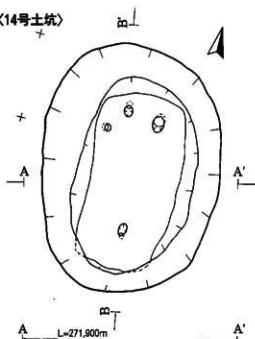
〔13号土坑〕

1. 10YR1.7/1 黒色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小1%未満
2. 7.5YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性强弱 黄褐色土粒極小3% 炭化物粒極小1%未満
3. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小~小1%
4. 10YR1.7/1 黒色シルト しまり弱 粘性强 下部に黄褐色土粒極小3% 炭化物粒極小1%未満
5. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小1~3% 炭化物粒極小1%未満
黄土粒極小1%未満
6. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり中~強 粘性强 黄褐色土粒極小1~3% (3層より増い)
7. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小1% 炭化物粒極小1%未満
8. 10YR6/6 切黄褐色シルト しまり弱 粘性强
9. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり中 粘性强 炭化物粒極小1%未満
10. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小~小1~3%
炭化物粒極小1~3%
11. 10YR5/5 黄褐色粘土質シルト しまり弱~中 粘性强~強
12. 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり弱~中 粘性强~中
13. 10YR6/4 灰~黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性强~強



第13図 12・13号土坑

〈14号土坑〉

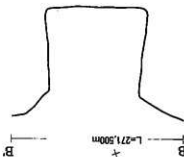
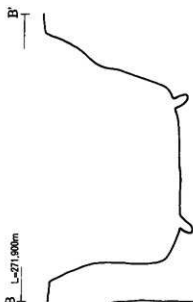


〈14号土坑〉

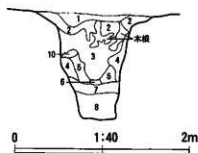
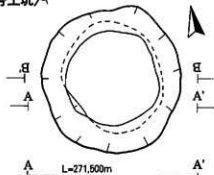
1. 7.5YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%未満
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり弱 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性強 黄褐色土粒極小1%未満
4. 10YR4/4 褐色シルト しまり中 粘性弱
5. 10YR4/6 褐色シルト しまり中～強 粘性弱 黄褐色土粒極小～小1%未満
6. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり中 粘性弱 黄褐色土粒極小～小1%未満
7. 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまり中 粘性中
8. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり弱 粘性中
9. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり弱 粘性中
10. 10YR4/6 褐色シルトと10YR3/4暗褐色シルトの混合土 しまり中～強 粘性中 黄褐色土粒小1%未満 (埋め戻し?)
11. 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 火山灰 (山形礫石) の粒含む
12. 10YR5/4 におい黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 (埋め戻し?)
13. 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 炭化物粒極小1%未満
14. 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 (7層より中や暗い)

〈15号土坑〉

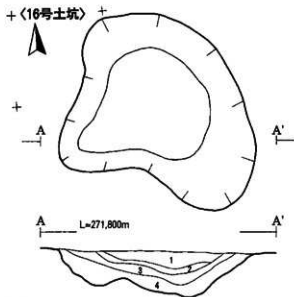
1. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性強弱 黄褐色土粒極小1%未満
2. 10YR5/4 におい黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性弱 黄褐色土粒極小1%未満
3. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱～中 粘性弱 炭化物粒極小1%
4. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中
5. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり弱 粘性弱～中
6. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中～強 粘性弱
7. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり弱 粘性弱 (黄褐色土粒と黒色土の混合土)
8. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中
9. 木根による凹凸
10. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト しまり弱 粘性中



〈15号土坑〉



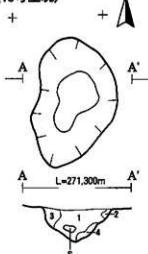
第 14 図 14・15号土坑



(16号土坑)

1. 7.5YR1.7/1 黒色シルト しまり弱 粘性强
2. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト しまり中~強 粘性强(火山灰?)
3. 10YR4/6 褐色シルト しまり中 粘性强 炭化物粒極小1%未満
4. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小1%

(18号土坑)

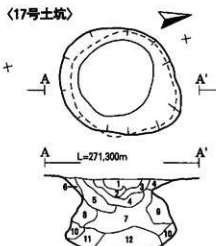


(18号土坑)

1. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり中 粘性强弱 炭化物粒極小1%
2. 10YR4/4 褐色シルト しまり中 粘性强

(19号土坑)

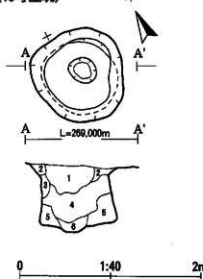
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小~小3~5% 炭化物粒極小~小1%
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强弱(1層よりやや暗い)
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小1%
4. 7.5YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小~小3%
5. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小1%
6. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり弱~中 粘性强 黄褐色土粒極小1~3%



(17号土坑)

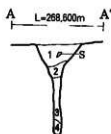
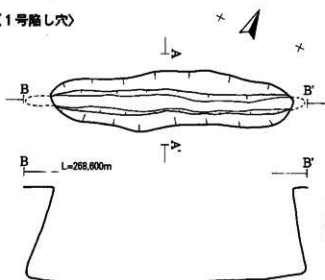
1. 7.5YR2/1 黒色シルト しまり中 粘性强弱 黄褐色土粒小1%
2. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱 粘性强弱 黄褐色土粒極小1%未満
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒小1%未満
4. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり弱~中 粘性强弱 黄褐色土粒極小~小3%
5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强弱 黄褐色土粒極小1%未満
6. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり中 粘性强弱 黄褐色土粒極小1%未満
7. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小~小3% 炭化物粒極小1%未満
8. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱 粘性强 黄褐色土粒極小1%未満 (7層よりやや暗い)
9. 10YR4/6 褐色シルト しまり中 粘性强 黄褐色土粒極小1%未満
10. 10YR4/4 褐色シルト しまり中 粘性强
11. 10YR4/6 褐色シルト しまり中 粘性强
12. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱~中 粘性强 (7層よりやや暗い)

(19号土坑)



第15図 16~19号土坑

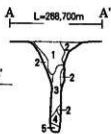
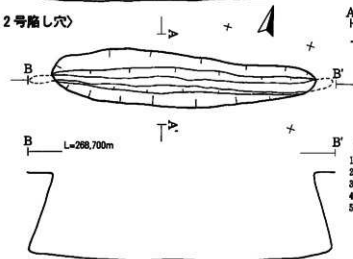
〈1号陥し穴〉



(1号陥し穴)

1. 7.5YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性弱
2. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性弱 黄褐色土紋跡小1%未満
3. 10YR4/8 褐色シルト しまり弱 粘性中 炭化物粒跡小1%未満
4. 7.5YR3/3 暗褐色シルト しまり弱 粘性中 (4層よりやや暗い)

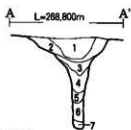
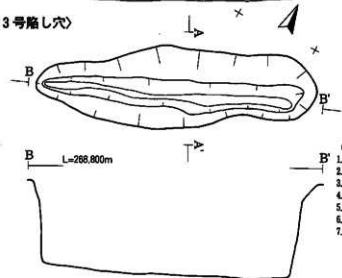
〈2号陥し穴〉



(2号陥し穴)

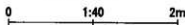
1. 7.5YR3/2 黒褐色シルト しまり中 粘性弱
2. 10YR5/6 黄褐色シルト しまり中 粘性中
3. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト しまり中 粘性中炭化物粒小1%未満
4. 10YR2/2 暗褐色シルト しまり弱 粘性強弱
5. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり弱 粘性強弱

〈3号陥し穴〉

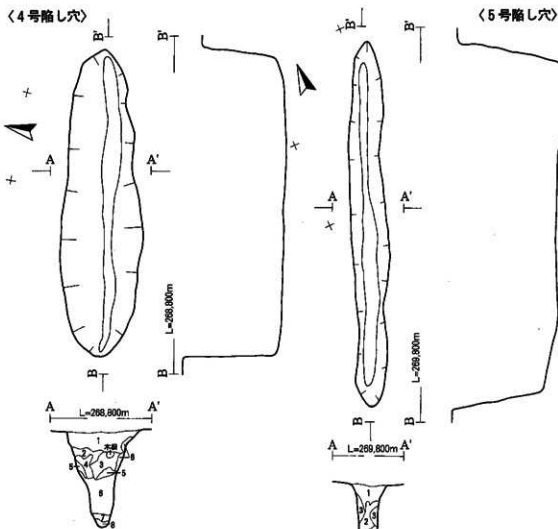


(3号陥し穴)

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまり弱~中 粘性強
2. 10YR3/2 黒褐色シルト しまり中 粘性強
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性強弱
4. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性弱 (黒褐色土と黄褐色土紋の混合土)
5. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中
6. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 (5層よりやや明るい)
7. 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 黒色土紋混入する (5層よりやや暗い)



第16図 1~3号陥し穴

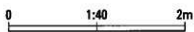


(4号陥し穴)

1. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり弱 粘性脆弱
2. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり中 粘性脆弱 黄褐色土粒極小1% 炭化物粒極小1%未満
3. 10YR2/3 黒褐色シルト しまり中 粘性脆弱 (2層よりやや暗い)
4. 10YR3/3 暗褐色シルト しまり中 粘性弱
5. 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり中 粘性弱
6. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中
7. 10YR4/6 褐色粘土質シルト しまり弱 粘性中 黒色土粒含む
8. 10YR4/6 褐色粘土質シルト (7層よりやや暗い)

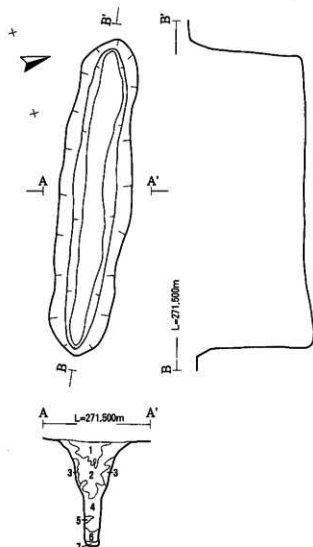
(5号陥し穴)

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり中 粘性脆弱
2. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性脆弱 黄褐色土粒極小1%未満
3. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性脆弱 黄褐色土粒極小1%未満 (2層より明るい)
4. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト しまり弱 粘性中 (黒色土粒と黄褐色土粒の混合土)
5. 10YR2/2 黒褐色シルト しまり中 粘性脆弱
6. 10YR3/2 黄褐色粘土質シルト しまり弱 粘性弱 (4層よりやや暗い)
7. 10YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性脆弱
8. 10YR2/1 黒色シルト しまり弱 粘性脆弱 (7層よりやや暗い)



第17図 4・5号陥し穴

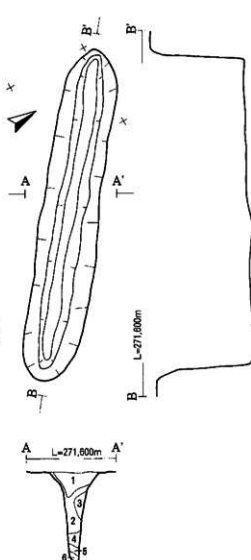
〈6号陥し穴〉



(6号陥し穴)

1. 10YR2/1 暗褐色シルト しまり中 粘性弱 下部に黄土粒極小5~7%
2. 7.5YR3/3 暗褐色シルト しまり中~強 粘性弱 黄褐色土粒極小3~5%
黄土ブロック中~大4ヶ所
3. 10YR3/4 暗褐色シルト しまり中 粘性弱 (暗褐色土粒と黄褐色土粒の混合土)
4. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト しまり中~強 粘性中~強 黒色土粒極小1%未満
5. 10YR4/4 褐色粘土質シルト しまり弱 粘性中
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト しまり中~強 粘性中~強
7. 10YR2/1 黒褐色シルト しまり弱 粘性強

〈7号陥し穴〉



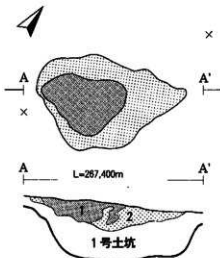
(7号陥し穴)

1. 7.5YR2/1 黒色シルト しまり弱~中 粘性強
2. 10YR2/2 暗褐色シルト しまり弱 粘性弱 黄褐色土粒小~極小3%
黄褐色土ブロック大2ヶ所
3. 10YR2/1 暗褐色シルト しまり弱 粘性強
黄褐色土粒極小3%未満 (2層よりやや暗らい)
4. 10YR3/2 暗褐色シルト しまり弱 粘性弱~中
5. 10YR3/2 暗褐色シルト しまり弱 粘性弱~中 (4層よりやや明るい)
6. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト しまり中 粘性中~強

0 1:40 2m

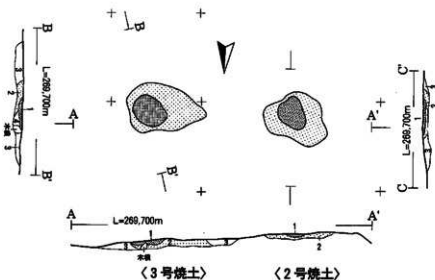
第18図 6・7号陥し穴

〈1号焼土〉



(1号焼土)

- | | | | | |
|-------------|--------|------|-----|-------------------------|
| 1. 5YR4/6 | 赤褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 5YR2/3 暗褐色シルトを含む |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | (弱い凝成を受ける) |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 黄褐色土微粉小1% 炭化物微粉小1%未測 |
| 4. 7.5YR2/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 | 黄褐色土微粉小3% 炭化物微粉小1%未測 |
| 5. 7.5YR2/2 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 | 黄褐色土微粉小5% |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱 | 粘性弱 | 黄褐色土微粉小10% 黄褐色土ブロック1%未測 |



(3号焼土)

- | | | | |
|-------------|--------|--------|-------------|
| 1. 5YR4/6 | 赤褐色シルト | しまり中～強 | 粘性無 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 炭化物微小1% |
| 3. 7.5YR4/4 | 褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 |
| 4. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | しまり中～強 | 粘性中 |

(3号焼土 A-A')

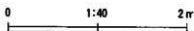
- | | | | |
|-------------|--------|--------|-------------|
| 1. 5YR4/6 | 赤褐色シルト | しまり中～強 | 粘性無 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 炭化物微小1% |
| 3. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | しまり中～強 | 粘性中 |

(2号焼土 C-C')

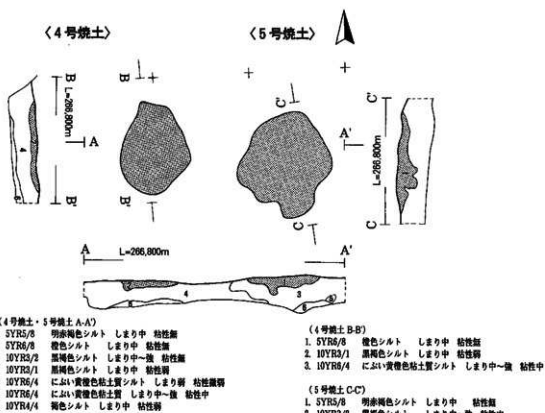
- | | | | |
|-------------|--------|--------|---------------|
| 1. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | しまり中～強 | 粘性無 |
| 2. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | しまり中 | 粘性中 |
| 3. 7.5YR4/4 | 褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 |
| 4. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 炭化物微小～小1% |

(2号焼土 A-A')

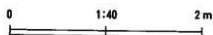
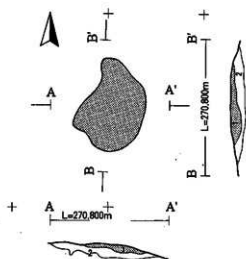
- | | | | |
|-------------|--------|--------|---------------|
| 1. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | しまり中～強 | 粘性無 |
| 2. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | しまり中 | 粘性弱 炭化物微小～小1% |



第19図 1～3号焼土



〈6号焼土〉



第20図 4～6号焼土

V. 出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器（大コンテナ換算約1箱）、石器（大コンテナ換算約1箱）である。遺物の記載は図と表で行い、本文中にその補足と概要を記している。

1. 土器

出土した土器は大コンテナ換算約1箱で、そのほとんどは縄文時代の土器である。これらのうち、接合・復元された個体を中心として、破片については口縁部、底部といった特徴的部位を、また体部については沈線文や貼付け文のほか比較的稀有と思われる地文を持つものを優先して掲載することにした。登録点数は50点である。なお、これらの中には同一個体の土器や登録後に接合した土器も含まれており、それらに関しては観察表において指摘した。以下、本文中では観察表の補足として特徴的な事項について記載する。

(1) 遺構内出土の土器

16号土坑から出土した1のみである。口縁部の一部を残す晩期の鉢であるが、口唇部上端面の刻みが明確ではなく、ほぼ平坦であることから大洞C2式の可能性が高い。

(2) 遺構外出土の土器

前述の1以外は全て遺構外からの出土である。土器はグリッド毎に取り上げているが、ほとんどは調査区内東端部の一定区域（SIV グリッド）から出土している。

8は結節無しの羽状縄文で胎土にも繊維を含むことから前期前半に相当する。10、11は同一個体で、竹管状工具による施文と文様展開などから大木6式前後と思われる。14、39、46、54などは渦巻状の隆帯による文様の構成から大木8b式前後に相当する。9、19、22、25、34、35、41、49、50などは縦方向への沈線区画と区画内施文などから大木9式～10式前半に相当する。1、7、16、36、44、49は晩期の鉢で、43は同時期の浅鉢、9は壺の口である。いずれも大洞C2-A式と思われる。

2. 石器

出土した石器は剥片石器が32点（石鏃3点、尖頭器2点、石匙2点、石鏝2点、不定形石器16点、使用痕ある剥片7点）、礫石器が20点（凹石・スリ石類 18点、石皿2点）、磨製石器が1点（磨製石斧1点）、石核・剥片が20点（石核1点、剥片19点）の合計73点であり、そのすべてを登録・図示した。以下、素材、形態、使用痕等により分類した器種毎に記述する。

野外調査中には出土した確については、原則として調査員が全て目を通してから石器と判断されるものを選択し収納した。それ以外は破棄している。この作業のうち半分近くは遺物の水洗前に行っているため、石器であっても自然曝と誤認して廃棄している個体も含まれていると思われる。特に擦痕や敲打痕が一部分のみにあるスリ石、敲石、台石などでは本来の出土点数より少ない報告点数になっている可能性が高いことを断っておく。

(1) 石鏃

4、59、100の合計3点が出土している。いずれも基部形状は凹基無茎鏃である。4は先端部に炭化物と思われる付着物が認められる。

(2) 尖頭器

2点出土している。85は遺構外から出土しており、木の葉形で両面調整が施されている6は4号陥し穴から出土している。先端部の一部は欠損の可能性がある。

(3) 石匙

握み部を持ち明らかに石匙と呼べるものが2点出土している。器体と握み部の位置関係は、77は握み部が器体の長軸方向1端につく縦型石匙である。二次加工の状況を見ると、背面は両側縁からの深い調整剥離末端が接している。両側縁の腹面への加工はみられず、調整剥離は片面加工であるが端部のやや折れた部分は両面加工が施されている。67は握み部が器体部の短軸方向1端につく横型石匙である。背面は調整剥離が浅く素材剥片の剥離面を残している。一部欠損しているが、握み部に近いほうの側縁は両面加工、反対側の側縁は片面加工で急角度の刃部を形成している。

(4) 石篋

ほぼ左右が対称で上方が狭く下方が広がっているものを石篋とした。2点出土している。97は頭部が尖っており、両側縁は片面調整で比較的粗雑である。刃部中央付近が鋸歯状に加工されており、深形調整の後、極浅形調整を施している。93も両側縁および刃部を片面調整により加工している。刃部の角度は浅い。

(5) 不定形石器

二次加工により刃部を形成している剥片で、各種のスクレイパー類を一括して不定形石器とした。合計17点の出土である。58は両側縁に刃部を形成する。82は深形の剥離調整により刃部を形成する。5はノッチ状の挟りがある。104は縦長の剥片で、1側縁は片面加工、反対側は両面加工された刃部をもつ。78も縦長の剥片で両側縁に刃部をもつ。79は1側面に極浅形の調整による刃部が形成されている。84は両面とも深形調整を主体としており、石匙等の先端部が折れたものの可能性がある。63は背面1側縁に刃部を形成する。66は錐部を欠損した石錐握み部の可能性が高い。96は背面両側縁および端部に刃部が形成され、側縁の角度は急である。

(6) 使用痕ある剥片

合計で9点の出土であり、図示した。剥片の形状は多様で、縁辺の一部ないしほぼ全周に使用による刃こばれと思われる微細剥離痕が観察できるものを抽出した。縁辺が摩滅して光沢を帯びるものが少数見られる。

(7) 石核

57の1点が出土している。図の上面を作業面とし、打面転移を繰り返し幅広の縦長剥片を生産している。一部に自然面を残しているほか、剥離面同士の間で風化度が異なる部分がある。

(8) 剥片

使用度等の観察できない剥片は合計16点である。石材は頁岩が圧倒的に多く、砂岩、凝灰岩、赤色頁岩が各1点存在する。これらは石鏃、石錐など小型の剥片石器の素材として準備されたものも含まれるであろうが、全体としては石器製作時の調整剥離によって生じたものが多いと考えられる。

(9) 磨製石器

75の1点が出土している。刃部は両面から丁寧に調整されており、若干の刃こぼれも確認される。頭部に向かって幅はほとんど変わらず、ズンドウ型である。折れた部分に加工もしくは使用の痕跡と思われる微細な剥離が見られる。

(10) 凹石・スリ石類

「擦る」もしくは「磨る」といった用法の結果擦面、摩擦面が形成されたものである。素材とする礫の形状を変えず、凹部（断面がすり鉢形や浅い皿形をなす、あるいは溝状に凹んでいる）、摩擦痕（表面が平滑に研磨されている）、擦痕（表面が一定の方向や範囲でザラザラと荒れた状態になっている）、敲打痕（敲打することによって形成されたザラザラした面が局所的に見られる）などが認められるもので、合計18点掲載した。これらの作用痕跡は1個体の石器に複数の組み合わせで残っているものも認められ、凹部のみ：10点（106、107、108、110、115、119、116、120、121、124）、凹部+摩擦痕・擦痕：7点（105、109、111、112、114、122、123）、摩擦痕・擦痕+敲打痕：1点（113）、となっている。ただし本報告書では、組み合わせの種類によらず、基本的に凹部を有するものを凹石として抽出し、残りを主となる作用痕跡からスリ石と区分した。

(11) 石皿

大型の偏平礫を素材とし、中央部がくぼむように加工を施しているものを石皿として抽出した。2点の出土である。118はゆるやかなくぼみ面に一部擦痕が確認される。117は擦痕のほか熱作用を受けたと思われる部分がくぼみ面の一部に確認される。

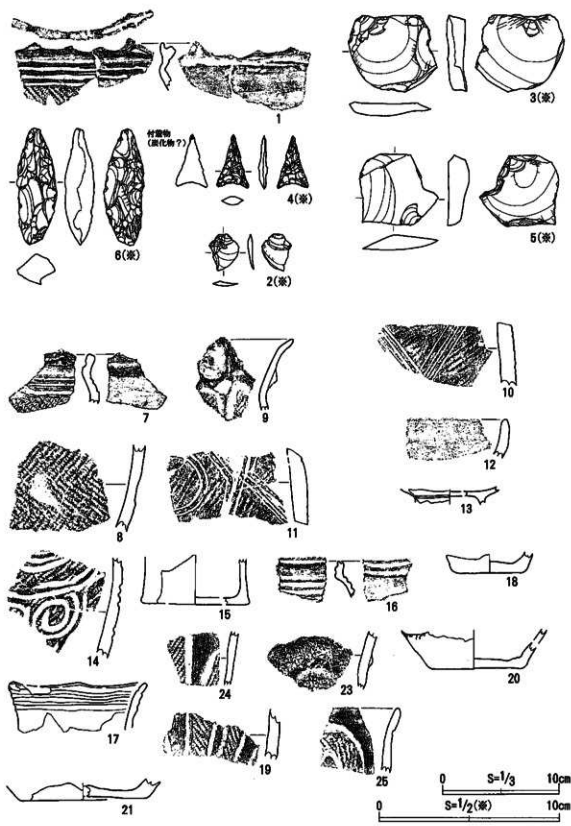
<引用・参考文献（V章）>

加藤智平・鶴丸俊明 1980 『図録石器の基礎知識Ⅰ・Ⅱ』柏書房。

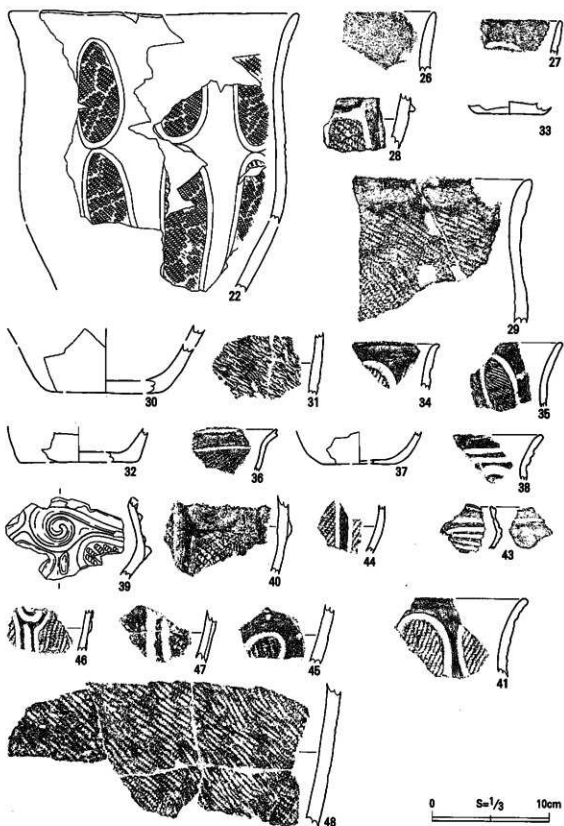
佐藤淳一・高木 晃 2001 『南畑遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第349集。

鈴木道之助 1980 『図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房。

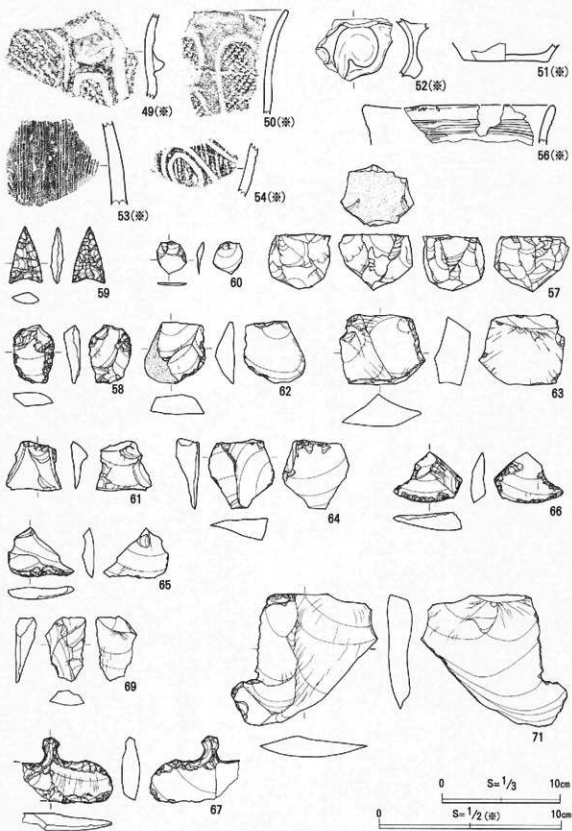
遺物 図 版



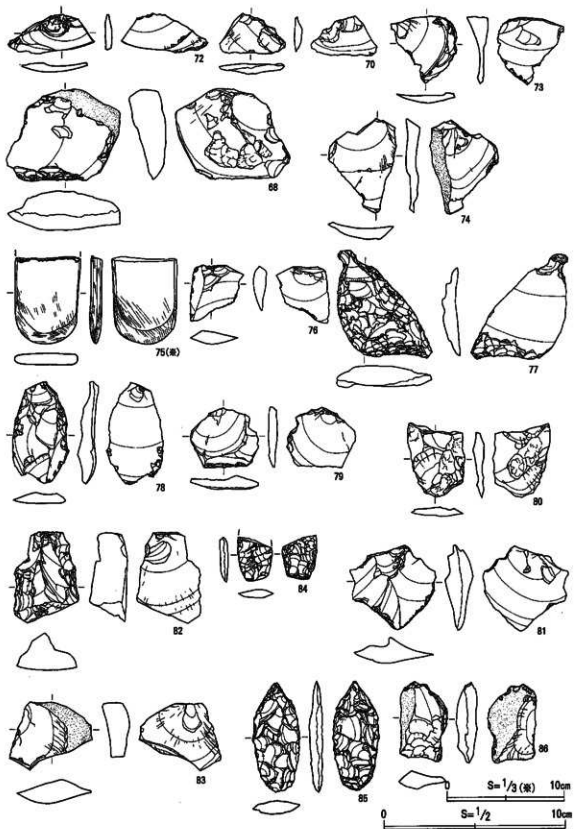
第 21 図 遺構内・遺構外出土遺物 (1)



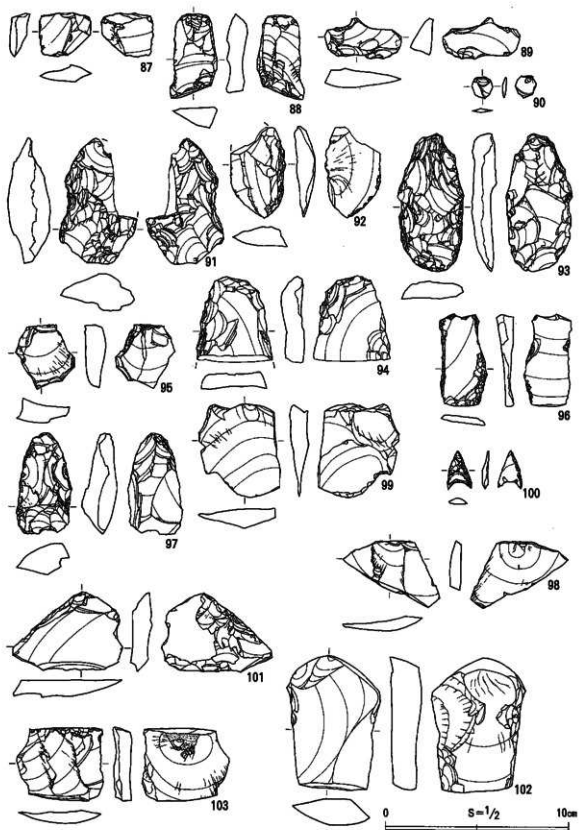
第 22 圖 遠構外出土遺物 (2)



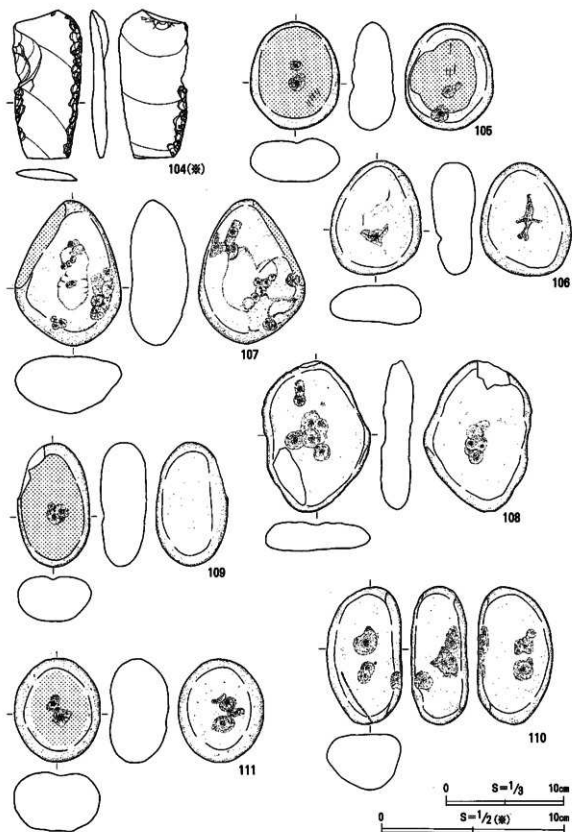
第 23 図 遺構外出土遺物 (3)



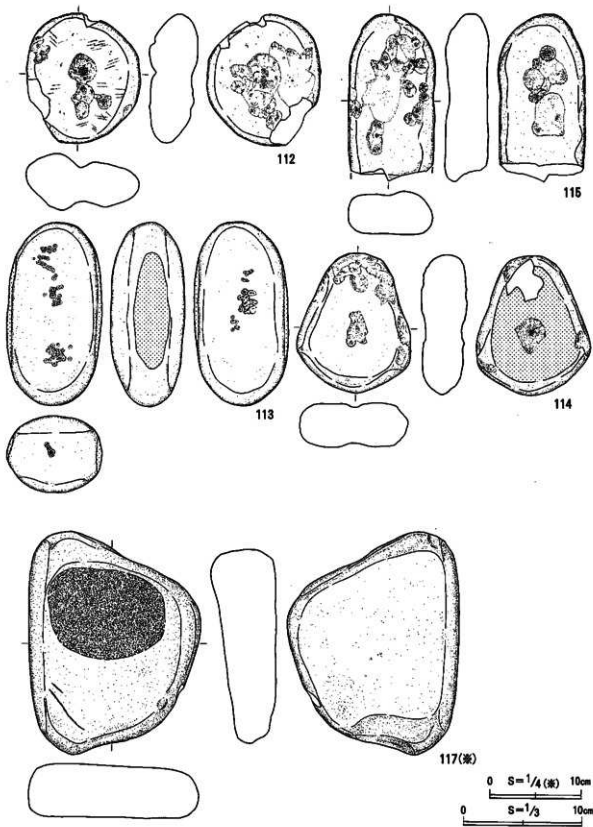
第24图 濠洲外出土遺物(4)



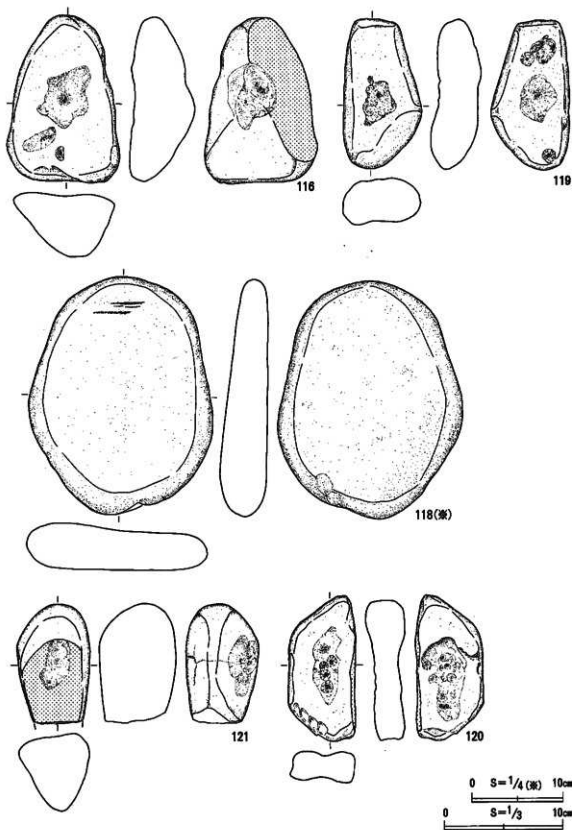
第 26 图 道溝外出土遺物 (5)



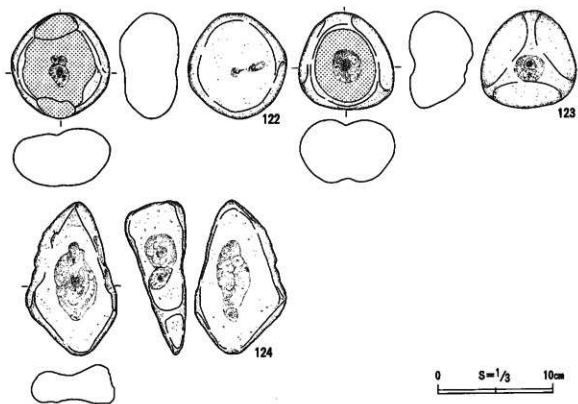
第 26 図 遺構外出土遺物 (6)



第27圖 遠禰外出土遺物(7)



第28图 遺構外出土遺物(8)



第29圖 遺構外出土遺物(9)

第3表 土器観察表

登録 図版	出土地点	部位	器種	時期	文 様 の 特 徴 等
51 1	I6号土坑埋土	口縁部	鉢	晩期	RL(縦)
49 7	RIVe6 II層下部~Ⅲ層	口縁部	鉢	晩期末	RL(縦) 頸部沈線 口唇部内面に沈線
50 8	RIVg5 II層下部~Ⅲ層	体部	深鉢	前期前半	羽状(胎部角) 胎土に織線含む 内面ケズリ
1 9	RIVf7 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢	中期末	波状口縁突起部 沈線区画内RLR(縦)
3 10	SⅡi10 II層下部~Ⅲ層(2と同一個体)	体部	深鉢	前期	0段多条?を充填後竹管状工具により施文
2 11	SⅡi10 II層下部~Ⅲ層(3と同一個体)	体部	深鉢	前期	0段多条?を充填後竹管状工具により施文
4 12	SIVb7 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢?	中期?	内面ケズリ
5 13	SIVc6 ~d6 II層	底部	鉢?	不明	合付3鉢か?
6 14	SIVc6 ~d6 +e5 ~g6 II層(45と同一)	体部	深鉢	中期後半	RL(縦) 沈線 内外面スス付着
7 15	SIVe8 II層下部	底部	深鉢	中期?	
8 16	SIVc8 埴土	口縁部	鉢	晩期末	口唇部上面に沈線
9 17	SIVc8 埴土	口縁部	深鉢?	晩期末	波状口縁 口唇部内面に沈線通る 壺の口
10 18	SIVc8 埴土	底部	深鉢?	不明	RL(縦)
11 19	SIVd4 II層下部~Ⅲ層	体部	深鉢	中期末	沈線区画内にLR(縦)
12 20	SIVd5 II層	底部	深鉢?	中期?	RL(縦) 内面焼けはじけ?
16 21	SIVd5 II層	底部	不明	不明	
13 22	SIVd5 II層下部~Ⅲ層	口縁-体部	深鉢	中期末	沈線区画内にLR(縦) 外面スス付着
14 23	SIVd5 II層下部~Ⅲ層	口縁部?	深鉢	中期?	捺写あり
15 24	SIVd5 II層下部~Ⅲ層	体部	深鉢	中期末	沈線区画内RLR(縦) 外面スス付着
19 25	SIVd7 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢	中期末	沈線区画内にRLR(縦) 無文部磨消 内面横方向ナデ
20 26	SIVd7 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢?	不明	内面ケズリ
18 27	SIVd7 ~8 II層	口縁部	深鉢?	中期?	沈線あり
41 28	SIVd7 ~8 +e6 ~7 II層	体部	深鉢	中期末	沈線区画内LR(縦) 胎状隆帯 内面焼けはじけ
17 29	SIVd7 ~8 +e7 ~e8 II層	口縁部	深鉢	中期?	LR(縦) 外面スス付着 内面ナデ、焼けはじけ
21 30	SIVd7 ~8 +e7 ~e8 II層	底部	不明	不明	
22 31	SIVd8 II層下部~Ⅲ層	体部	深鉢?	晩期?	LLR(縦) 直前段半掘りか?
23 32	SIVd8 II層	底部	不明	不明	
24 33	SIVe2 II層	底部	不明	不明	底面に沈線状の溝あり
25 34	SIVe3 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢	中期末	沈線区画内にRL(縦) 口唇部付近横ナデ
26 35	SIVe5 II層	口縁部	深鉢	中期末	沈線区画内にLR(縦)
27 36	SIVe5 II層	口縁部	鉢	後~晩期?	LR(縦) 頸部沈線 口唇部上面沈線 内面スス
28 37	SIVe5 II層	底部	不明	不明	LR(縦) 内面ケズリ
30 38	SIVe5 II層	口縁部	深鉢	中期?	頸部に沈線が高まる?
31 39	SIVe5 II層	口縁部	深鉢	中期	隆帯の裾に沈線 区画内にRL(縦)
33 40	SIVe5 II層	体部	深鉢	中期	LR(縦) 胎状の隆帯 内面焼けはじけ
32 41	SIVe5 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢	中期末	沈線区画内にRLR(縦) 内面横方向ミガキ
29 42	SIVe5 ~6 II層	底部	不明	不明	
34 43	SIVe5 ~6 II層	口縁部	浅鉢	晩期末	沈線 口唇部上面に沈線
35 44	SIVe5 ~6 II層	体部	鉢	後~晩期	RLR(縦) 無文部は沈線で区画後磨消
36 45	SIVe5 ~6 II層	体部	深鉢	中期?	RL(縦)? 沈線 内面スス付着
37 46	SIVe5 ~6 II層	体部	深鉢	中期後半	RLR(縦) 沈線と貼付け隆帯による文様
38 47	SIVe5 ~6 II層	体部	深鉢	中期後半	隆帯の裾に沈線 区画内にLR(縦)
39 48	SIVe5 ~6 II層	体部	深鉢	中期?	LR(縦) 胎土に雲母含む
40 49	SIVe5 ~7 II層	体部	深鉢	中期末	隆帯の裾に沈線 区画内にLR(縦)
42 50	SIVf1 II層下部~Ⅲ層	口縁部	深鉢	中期末	沈線区画内RLR(縦)
43 51	SIVf3 II層	底部	不明	不明	急に立ちあがってからゆるやかに外縁
44 52	SIVf4 II層	体部	不明	中期末	貼り付け隆帯の一部
46 53	SIVf5 II層	体部	深鉢	中期?	帯筒状工具による縦方向への施文
45 54	SIVf5 II層(6と同一個体)	体部	深鉢	中期後半	RL(縦) 沈線 内外面スス付着
47 55	SIVf7 II層下部~Ⅲ層	底部	不明	不明	
48 56	SIVg2 II層	口縁部	深鉢?	不明	頸部に竹管状工具による沈線が通る

第4表 剥片・剥片石器観察表

登録	図版	出土地点	器種	石質	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
12	2	15号土坑 埋土上部	剥片	頁岩(奥羽山脈)		20	20	2
13	3	15号土坑 埋土上部	剥片	頁岩(奥羽山脈)		43	49	11
1240	4	16号土坑埋土上部	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	凹基無蓋縁			
21	5	2号埋土周辺	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁ノッチ状	40	42	12
382	6	4号陥し穴	尖頭器	頁岩(奥羽山脈)		65	22	17
17	57	RⅢd8 Ⅱ層下部	石鏝	赤色頁岩(奥羽山脈)		41	31	33
16	58	RⅣa5 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	2側縁刃部形成	33	23	9
43	59	RⅣa6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	凹基無蓋縁	33	19	8
45	60	RⅣa8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		18	16	3
14	61	RⅣb6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		26	30	8
15	62	RⅣb6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		34	34	11
44	63	RⅣj8 Ⅱ層下部	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁刃部形成	38	47	19
4	64	SⅢa9 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		39	36	13
6	65	SⅢd7 Ⅱ層下部	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁刃部形成	27	36	7
46	66	SⅢe10 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	2側縁調整 石鏝先端部欠損?	28	38	10
42	67	SⅢf10 Ⅱ層下部～Ⅲ層	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	1部欠損 端部急角度片面加工	36	(50)	10
3	68	SⅢf9 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	凝灰岩(奥羽山脈)	1側縁端部欠損刃部形成	49	63	21
5	69	SⅢi10 Ⅱ層～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		35	22	11
7	70	SⅢi8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		22	36	6
949	71	SⅣa7 Ⅱ層下部～Ⅲ層	使用痕ある剥片	頁岩(奥羽山脈)	側縁微細割縁	71	80	14
35	72	SⅣb6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	部分的に刃部形成	21	48	5
33	73	SⅣc6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	使用痕ある剥片	頁岩(奥羽山脈)	1部微細割縁	37	37	12
34	74	SⅣc6-d6 Ⅱ層下部	剥片	頁岩(奥羽山脈)		52	38	9
41	75	SⅣc7 Ⅱ層(木根の間)	磨製石斧?	頁岩(奥羽山脈)	折れ面一部再利用率?	(72)	53	10
32	76	SⅣc7 Ⅱ層下部	使用痕ある剥片	頁岩(奥羽山脈)	1部微細割縁	51	29	7
36	77	SⅣc7 Ⅱ層下部	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	2側縁片面加工 積み部から一番遠い端部片面加工	58	58	12
38	78	SⅣc8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	2側縁刃部形成 部分的に片面加工	56	31	10
30	79	SⅣc8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁片面加工による刃部	33	38	7
29	80	SⅣc8 文化層トレンチ跡土	剥片	赤色頁岩(奥羽山脈)	磨けハジケ	36	31	6
31	81	SⅣc8 文化層トレンチ跡土	不定形	頁岩(奥羽山脈)	3側縁にわたり微細な刃部形成	46	48	16
18	82	SⅣd4 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁急角度刃部	50	36	21
9	83	SⅣd5 Ⅱ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		38	45	15
38	84	SⅣd5 Ⅱ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	全周片面加工、石鏝の先端部か?	(24)	19	5
40	85	SⅣd5 Ⅱ層下部～Ⅲ層	尖頭器	頁岩(奥羽山脈)	全周片面にわたり細かい調整木の葉型	60	26	7
2	86	SⅣd6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		44	26	12
1	87	SⅣd6-d7 Ⅱ層	使用痕ある剥片	頁岩(奥羽山脈)	1側縁微細割縁	23	28	11
11	88	SⅣd6-d7 Ⅱ層	使用痕ある剥片	頁岩(奥羽山脈)		44	23	11
24	89	SⅣd6-d7 Ⅱ層	使用痕ある剥片	凝灰岩(奥羽山脈)	1側縁微細割縁	20	42	12
948	90	SⅣd7-d8 Ⅱ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		12	11	2
8	91	SⅣd8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1部欠損	69	42	24
10	92	SⅣd8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	使用痕ある剥片	砂岩(奥羽山脈)		(50)	30	12
39	93	SⅣd8 Ⅱ層下部～Ⅲ層	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	片面加工による細かい調整	75	36	18
22	94	SⅣe2 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	砂岩(奥羽山脈)	側縁全周急角度刃部	(47)	42	18
945	95	SⅣe2 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁急角度刃部	35	33	13
947	96	SⅣe4 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	縦長剥片3側縁にわたり刃部形成	50	26	9
37	97	SⅣe4 文化層トレンチ跡土	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	片面加工、端部急角度で縁部状	55	31	20
20	98	SⅣe5-e6 Ⅱ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		32	44	6
19	99	SⅣe6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	剥片	凝灰岩(奥羽山脈)		61	42	10
1176	100	SⅣe6 Ⅱ層下部～Ⅲ層	石鏝	頁岩(奥羽山脈)	凹基無蓋縁			
26	101	SⅣf4 Ⅱ層	使用痕ある剥片	赤色頁岩(奥羽山脈)	1側縁一筋刃部	60	43	11
25	102	SⅣf5 Ⅱ層下部～Ⅲ層	使用痕ある剥片	カマンファルス(北上山地)	2側縁微細割縁	73	50	16
27	103	SⅣg2 Ⅱ層	剥片	頁岩(奥羽山脈)		41	48	11
33	104	SⅣh1 Ⅱ層下部～Ⅲ層	不定形	頁岩(奥羽山脈)	1側縁は片面加工、もう1側縁は片面加工による刃部	81	38	10

第5表 礫石器観察表

登録	図版	出土地点	器種	石質	備考	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)
2	106	RIVc10 II層～III層	凹み	安山岩 (奥羽山脈)	凹み部の周囲に摩滅痕	87	73	37
3	106	RIVc9 II層下部	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	溝状の凹み	92	75	35
4	107	SIIIc5 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	1側面に摩滅痕	118	86	46
5	108	SIIIh10 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)		(122)	87	24
6	109	SIVb6 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面に摩滅痕	100	59	38
9	110	SIVc6～c6 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	側面にも凹み	112	61	45
10	111	SIVc6～c6 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面(片面)に摩滅痕	84	70	48
8	112	SIVc7 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面に擦痕	107	97	46
7	113	SIVc7 II層下部～III層	スリ	石英安山岩 (奥羽山脈)	側面に擦痕	145	77	63
12	114	SIVd4 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面(片面)に摩滅痕	113	93	37
11	115	SIVd5 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)		135	70	35
14	116	SIVd5 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	1側面に摩滅痕	134	92	50
15	117	SIVd7～d8 II層	石皿	石英安山岩 (奥羽山脈)	一部被熱	244	186	70
1	118	SIVd7 II層	石皿	石英安山岩 (奥羽山脈)	擦痕あり	260	200	51
13	119	SIVd7 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)		122	64	37
16	120	SIVc6 II層下部～III層	凹み	凝灰岩 (奥羽山脈)	1側面に摩滅痕	(118)	54	32
17	121	SIVf1 II層下部～III層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面(片面)に摩滅痕	97	60	62
18	122	SIVf3 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹み面に計3面の摩滅痕	89	82	50
19	123	SIVf3 II層下部	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	凹みのある面(片面)に摩滅痕	80	80	53
20	124	SIVg2 II層	凹み	石英安山岩 (奥羽山脈)	側面にも凹み	13	76	33

VI. 考察

1. 遺構

(1) 堅土住居状遺構

1棟検出した。覆土上部に存在した焼土遺構の精査をすすめるうちに明らかとなったものである。壁面は最も標高の高い一部において、若干の挿込みが確認される。炉は認められず、柱穴状のピットが数基確認される。壁の立ち上がり具合や柱穴状ピットの配置、断面観察などの結果を総合的に判断して住居状遺構として登録したものである。しかしながら、谷状地形の谷頭部へ立地することや周囲に他の住居あるいは住居状遺構が存在しないこと、遺構あるいは周辺から遺物の出土がほとんど見られないことなどについても考慮する必要がある。

(2) 土坑

全部で19基検出している。基本的に、遺構検出の段階において平面形が溝状や住居状をなさないものについて、一括して土坑として登録し室内整理においても変更をしていない。このうち、平面形が楕円形を基調とし、断面がピーカー状をなす土坑が全部で7基検出されている。これらはさらに底面に小穴を持つものと持たないものに分類され、小穴の配置についても底面中央部に1ヶ所持つものと底面長軸の両端に2個と1個の対になるものを持つものに分けられる。また、平面形が円形を基調とし、土坑の壁面がオーバーハングするいわゆるフラスコ状の土坑が4基検出されている。これら以外の土坑は8基検出されているが、規模、底面や壁の状況などに規則性は見られない。

ここで、それぞれの機能について考えてみることにする。考古学において積み重ねられてきた数々の経験を一般的な常識とし、それに基づいて推論していくならば、楕円形基調の土坑は陥し穴であり、底面の小穴は獲物を捕らえるための逆茂木や殺傷用の杭を埋め込むための穴ということになる。また、円形基調で断面がフラスコ状をなす土坑については木の実などの食糧を貯えておくための貯蔵穴ということになる。したがって、本遺跡内あるいは近隣に集落が存在する可能性は否定できない。しかしながら、逆説的に見れば遺物として木の実などの堅果類が出土していないことや、広い調査区内に住居跡がほとんど存在していないことなどから、一概に貯蔵穴と判断してよいかどうかということも慎重に検討されるべきである。

(3) 陥し穴状遺構

平面形が溝形をなすものについて、一括して陥し穴として登録した。全部で7基検出している。検出数が少ないこともあり、全体的な配置に関しての規則性などについて述べることはできない。しかし、SⅢグリッドに位置する1号～4号陥し穴については、尾根状部分から谷頭（沢）に向かってほぼ2m間隔で4基連続して検出されている。規模や覆土についてほぼ同様であることから、同時期につくられたものと見て間違いないと思われる。また、陥し穴の覆土観察の状況から、5～7号陥し穴は検出時、断面観察時の両方において、黒色～黒褐色土の含まれる割合が非常に高い。これに対して1～4号陥し穴の覆土は褐色～黄褐色土を主体としており、検出時危うく見逃すところであった。本遺跡における基本土層を考慮し、褐色系よりも黒色系の土が新しいとするならば、5～7号陥し穴と1～4号陥し穴の構築時期に若干の時期差が考えられる。

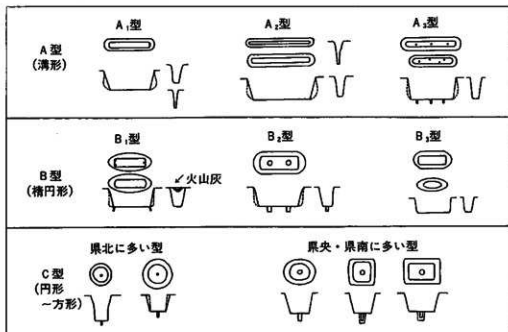
陥し穴に関して(2)において述べたものも含めて検討してみると、本遺跡における陥し穴は①群：円形

～楕円形基調で底面中央に小穴を持つ陥し穴（1、2、6号土坑）、②群：楕円形基調で底面長軸の両端に2個と1個の対をなす小穴を持つ陥し穴（10、13、14号土坑）③群：溝状の陥し穴（1～7号陥し穴）、といった3つのパターンに分類できる。遺構の絶対数が少ないため、これだけのサンプルによってパターン化することは危険が伴うとは思われるが、こうした状況を折り込みつつ、地形から陥し穴の占地について見てみることにする。すると、①群の陥し穴は谷状地形の谷頭部付近に位置し、②群の陥し穴は尾根状部分に位置する。また、③群の陥し穴は尾根から谷状地形に向かう線に沿って配置されるというおおまかな傾向をうかがうことができる。

陥し穴遺構に関しては田村（1987）により、岩手県北部を中心とした陥し穴状遺構の分類と時期の検討がなされている。それによると、陥し穴状遺構はA型（溝形）、B型（楕円形）、C型（円形～方形）に分類され、さらに規模、小穴の有無、覆土に含まれる火山灰などによりそれぞれ細分される。彼はこれらの構築時期についても検討を加えており、C型（縄文前期初頭以前）→A型（縄文中期末～後期初頭）→B₁型（縄文晩期中葉～平安時代前期）となることを示している。この分類に従えば、本遺跡における陥し穴遺構は①群がC型、②群がB型、③群がA型に相当する。しかしながら、田村の分類がおもに岩手県北部の遺跡を中心とした分類であり、県南部はほぼ一括されているということ。また、本遺跡における②群の陥し穴の覆土中に、明確なTo-a火山灰を確認できなかったことなどから、本遺跡との时期的な対比についてはあくまで参考程度にとどめておきたい。

（4）焼土遺構

火を焚いた跡と思われる遺構は全部で6基検出している。周囲を注意深く観察したが、堅穴住居跡の炉になる可能性のあるものは認められない。尾根筋で検出された2号・3号焼土の周辺からは比較的多くの遺物が出土しているが、かなりの時期差を伴うため時期の推定も困難である。また、1号、4～6号焼土の周辺から遺物はほとんど出土していない。



第30図 陥し穴の形態分類（田村1987による）

2. 遺物

(1) 出土土器について

今回の調査で出土した土器に関しては、その全ての土器片に目を通した。その結果、文様、モチーフを持つ土器についてはもちろんのこと、粗製土器や縄文の地文のみが施文される破片、あるいは底部のみ残存している破片などについても、それらを構成する胎土や内面の調整等を総合的に判断し、該当時期の特定を行った。また、土器片自体の摩滅が激しいものなど破片だけでは判断できないものについては不明とした。内訳は全51点のうち縄文前期に相当するものが3点、中期に相当するものが28点、晩期に相当するものが8点、不明が12点である。このように縄文中期に相当する土器が過半を占める結果となった。

(2) 出土石器について

①資料の性格

大清水遺跡における今回の調査で出土した土器はほぼ全てが縄文時代に属すると判断された。しかしながら遺構内からの出土遺物が少ないこと、出土した遺物に時期差が認められること（前期～晩期）、などから一時期における遺跡の姿を明らかにしたとは言い難い。したがって、単一時期の資料として把握できる遺物群を資料化してはいないことを念頭に置いた上で、出土した石器群の石材利用と器種組成について検討する。

②使用石材の構成

剥片素材の石器32点及び石核1点、剥片18点を合計した51点の内、頁岩を使用しているものが42点であり全体の82%に上る。他には砂岩2点、凝灰岩3点、赤色頁岩3点、ホルンフェルスが1点という状況である。大清水遺跡の立地する奥羽山系はグリーンタフ地帯に相当し頁岩産出地帯でもある。出土石器の理化学的な産地同定は行っていないが、肉眼による産地の鑑定を依頼した結果はいずれも奥羽山系の頁岩である可能性が高いというものである。泥岩、赤色凝灰岩、珉瑠も頁岩と同様に奥羽山系産出とされた。つまり剥片素材としてはほぼ近隣で採集可能な石材を利用していると判断できる。

礫石器類は合計20点を登録しており、使用される石材の内訳は多い順に石英安山岩18点、凝灰岩1点、安山岩1点となる。このように礫石器のほとんどは石英安山岩を石材としていることが明らかとなった。これらの石材は肉眼鑑定によりいずれも奥羽山系で産出するものの可能性が高いと判断され、剥片石器素材原石と同様に、在地で豊富に産出する石材を多用しており、遠隔地からの素材の搬入は可能性が極めて低いと考えられる。

3. まとめ

(1) 遺構・遺物の特徴

今回の調査によって明らかとなった遺構、遺物の特徴についてまとめてみることにする。

堅穴住居跡に関しては住居跡となるものを1棟検出したのみである。周辺地形、共存遺物が見られないこと等を含めて鑑みれば明確なものとはいえない。

土坑については陥し穴と思われる楕円形の土坑と貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が主体で、それに小規模な土坑が検出された。楕円形の陥し穴については底面に小穴を伴うものが多い。

土器は縄文前期～晩期に至る時期のものが出土しており、全体的には中期後半に相当する大木8b～9式前後の土器が多い。

石器は剥片石器、礫石器共に在地で豊富に産出する石材を使用している可能性が高い。

(2) 遺跡の全体像

上記の個々の遺構、遺物に関する特徴を踏まえ、大清水遺跡について全体的な状況を考えてみると、以下の点が挙げられる。

まず、検出された陥し穴遺構と周囲から出土した土器から、本遺跡は縄文時代前期～晩期にかけて存在した持場の可能性が考えられる。ただし、このような土器編年による時期差に加えて、陥し穴の規模、形態、配置等から判断すると、全ての遺構が同時期に機能していた可能性は低いと思われる。おそらく、①円形～楕円形基調で底面中央に小穴を持つ陥し穴、②楕円形基調で底部長軸の両端に2個と1個の対になる小穴を持つ陥し穴、③溝状の陥し穴、といった3つの種類が時期を異にして存在したのではないかと考えられる。しかしながら、各々の具体的な時期に関しては、指標と成りうる火山灰を確認できなかったことや明確な遺構の切り合い関係が存在しなかったことなどから、時期の特定は不可能と述べるを得ない。

次に、貯蔵穴と思われるフラスコ状土坑の存在から集落の存在する可能性が考えられる。調査区内では堅穴住居跡を検出していないが、尾根状地形の延長部となる調査区東側や西側（現在は削平されている）については、地形や遺物の出土状況等から推測して、その可能性は十分考えられる。

<引用・参考文献（VI章）>

- 佐藤宏之 1999 「遺構研究 陥し穴」縄文時代 第10号：211～220。
佐藤宏之 1998 「陥し穴の土俗考古学—狩猟技術のシステムと構造—」『縄文式生活構造・土俗考古学からのアプローチ』同成社。
田村壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要 Ⅷ：25～44。
千葉 悟 1999 『円万寺館遺跡』花巻市埋蔵文化財調査報告書第20集。
藤村東男 1984 『縄文土器の知識Ⅱ 中・後・晩期』東京美術。

写 真 图 版



遺跡遠景(東から)



調査区近景

写真図版1 遺跡遠景・調査区近景



作業遠景（検出）



調査終了後風景

写真図版2 作業風景・調査終了後



調査前風景



作業風景（雑物撤去）



調査開始



基本土層 ①



基本土層 ②

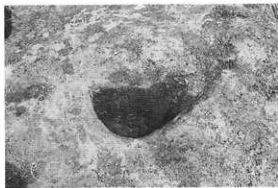
写真図版 3 調査前風景・基本土層



1号住居状 (完観)



1号住居状 (断面)



1号住居状 柱穴 (断面)

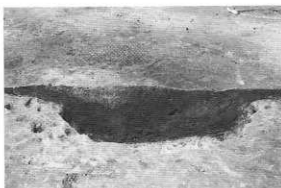


作業風景 (検出)

写真図版 4 1号住居状



1号土坑(完掘)



1号土坑(断面)



2号土坑(完掘)



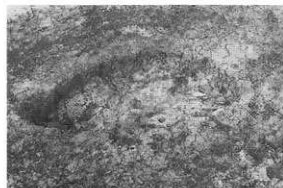
2号土坑(断面)



3号土坑(完掘)



3号土坑(断面)



4号土坑(完掘)



4号土坑(断面)

写真图版 5 1~4号土坑



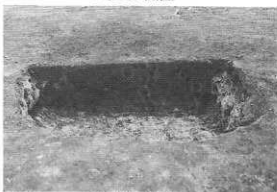
5号土坑 (完掘)



5号土坑 (断面)



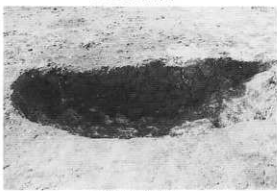
6号土坑 (完掘)



6号土坑 (断面)



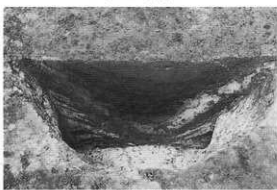
7号土坑 (完掘)



7号土坑 (断面)



8号土坑 (完掘)



8号土坑 (断面)

写真图版 6 5~8号土坑



9号土坑 (完掘)



9号土坑 (断面)



10号土坑 (完掘 ①)



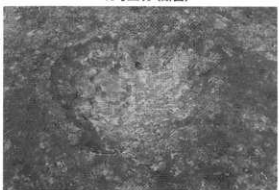
10号土坑 (完掘 ②)



10号土坑 (断面)



作業風景 (精査)



11号土坑 (完掘)



11号土坑 (断面)

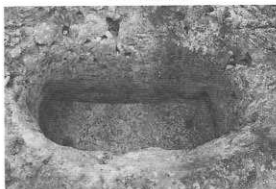
写真図版 7 9～11号土坑



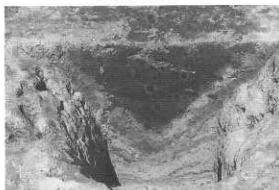
12号土坑 (完掘)



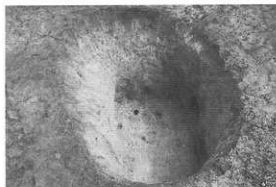
12号土坑 (断面)



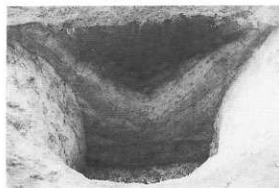
13号土坑 (完掘)



13号土坑 (断面)



14号土坑 (完掘)



14号土坑 (断面)



15号土坑 (完掘)



15号土坑 (断面)

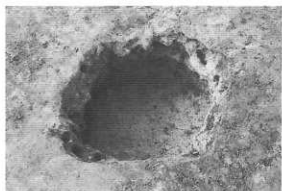
写真図版 8 12~15号土坑



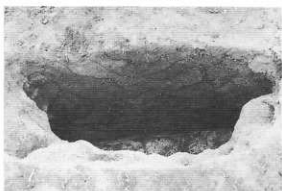
16号土坑 (完掘)



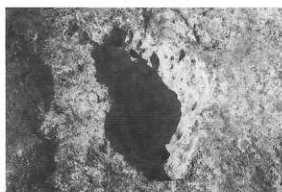
16号土坑 (断面)



17号土坑 (完掘)



17号土坑 (断面)



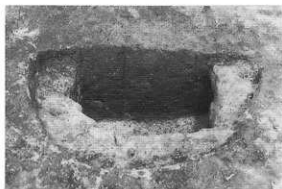
18号土坑 (完掘)



18号土坑 (断面)

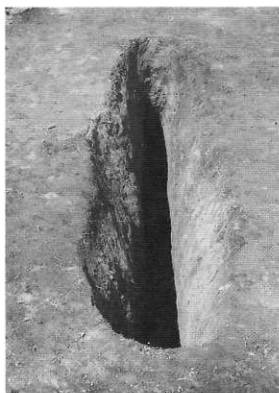


19号土坑 (完掘)



19号土坑 (断面)

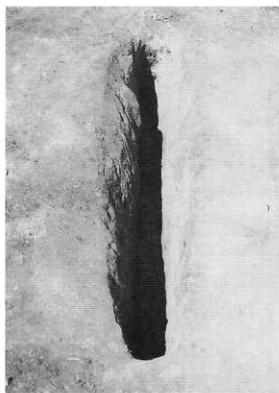
写真图版 9 16~19号土坑



1号陥し穴 (完掘)



1号陥し穴 (断面)

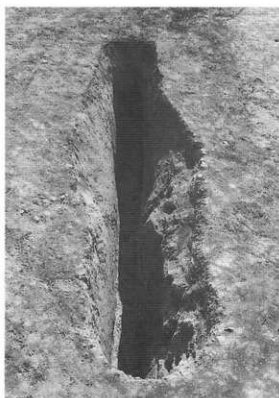


2号陥し穴 (完掘)



2号陥し穴 (断面)

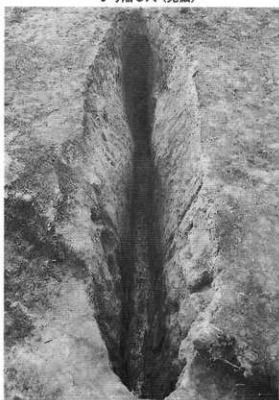
写真図版10 1号・2号陥し穴



3号陥し穴 (完掘)



3号陥し穴 (断面)

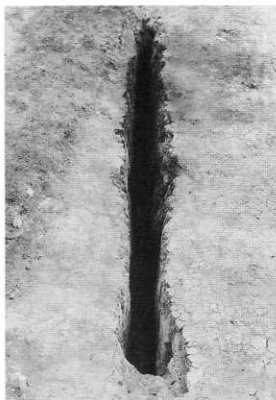


4号陥し穴 (完掘)

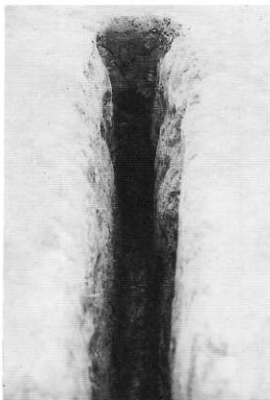


4号陥し穴 (断面)

写真図版11 3号・4号陥し穴



5号陥し穴(完観)



5号陥し穴(断面)

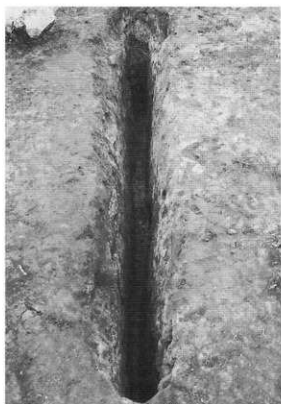


6号陥し穴(完観)



6号陥し穴(断面)

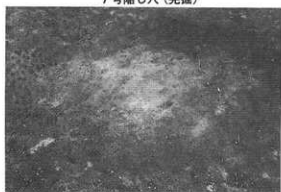
写真図版12 5号・6号陥し穴



7号陥し穴 (完掘)



7号陥し穴 (断面)



1号焼土 (平面)



1号焼土 (断面)

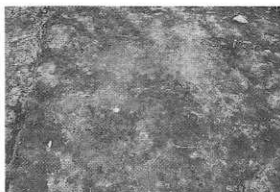


作業風景 (試掘)



作業風景 (精査)

写真図版13 7号陥し穴・1号焼土



2号・3号(平面)



2号焼土(断面)



3号焼土(断面)



4号・5号焼土(平面)



4号焼土(断面南から)



4号焼土(断面西から)



作業風景(精査)



作業風景(実測)

写真図版14 2~5号焼土



5号焼土(断面南から)



5号焼土(断面西から)



6号焼土(平面)



6号焼土(断面南から)



6号焼土(断面東から)



作業風景(検出)

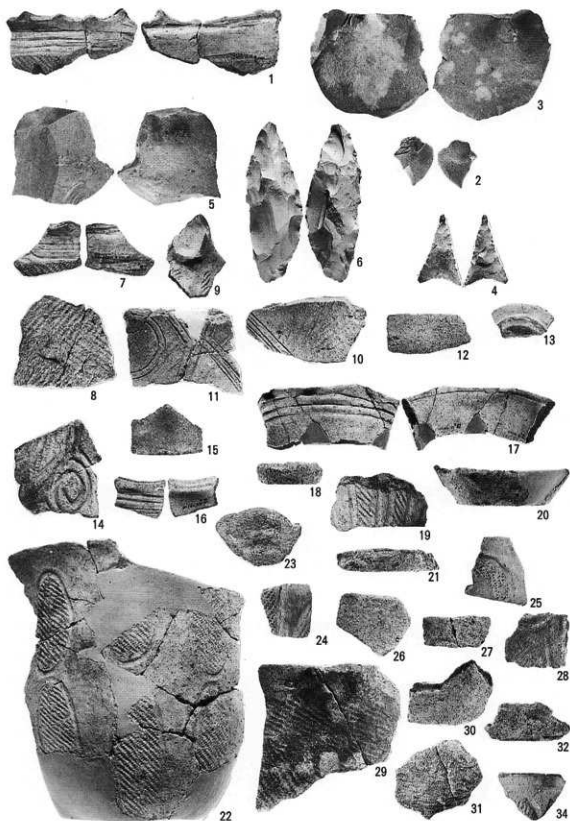


遺物出土状況①

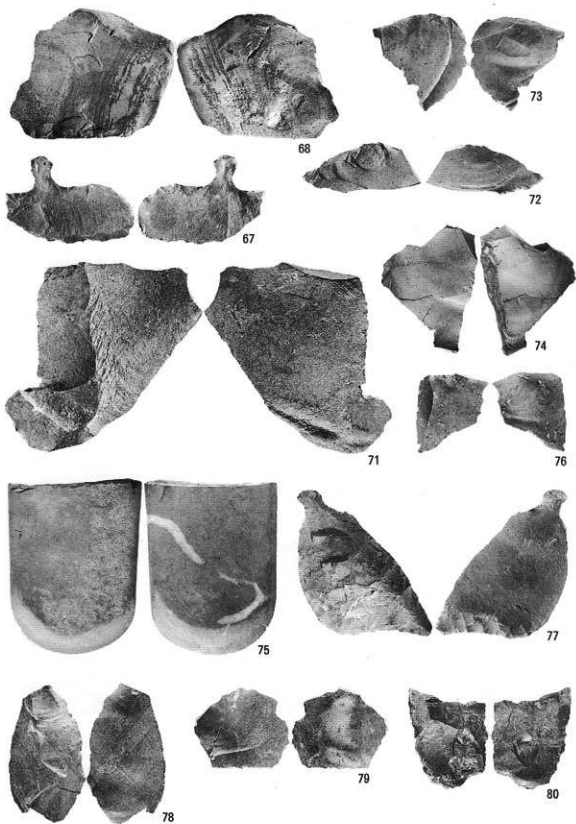


遺物出土状況②

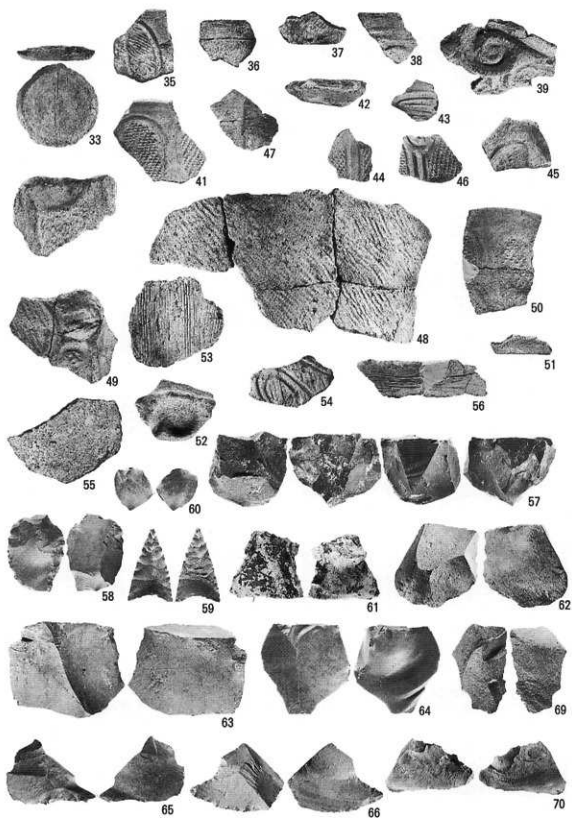
写真図版15 5号・6号焼土・遺物出土状況



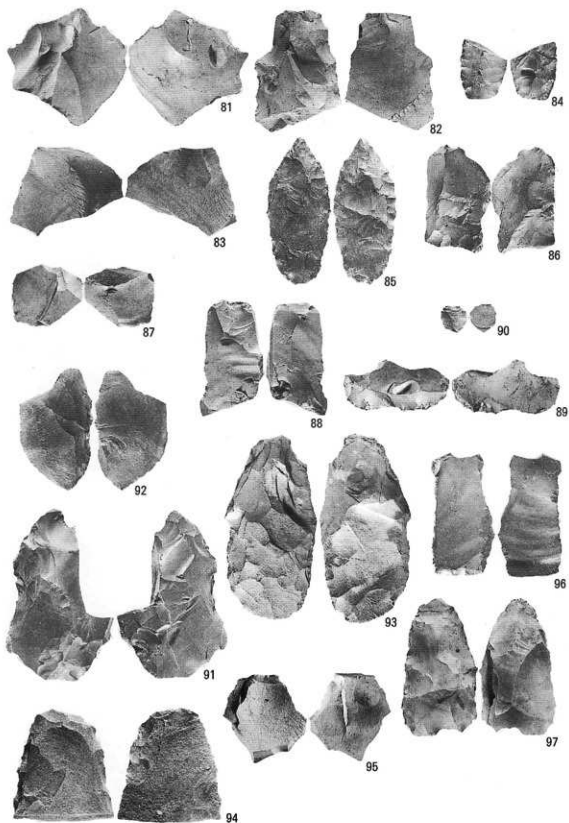
写真図版16 遺構内・遺構外出土遺物 (1)



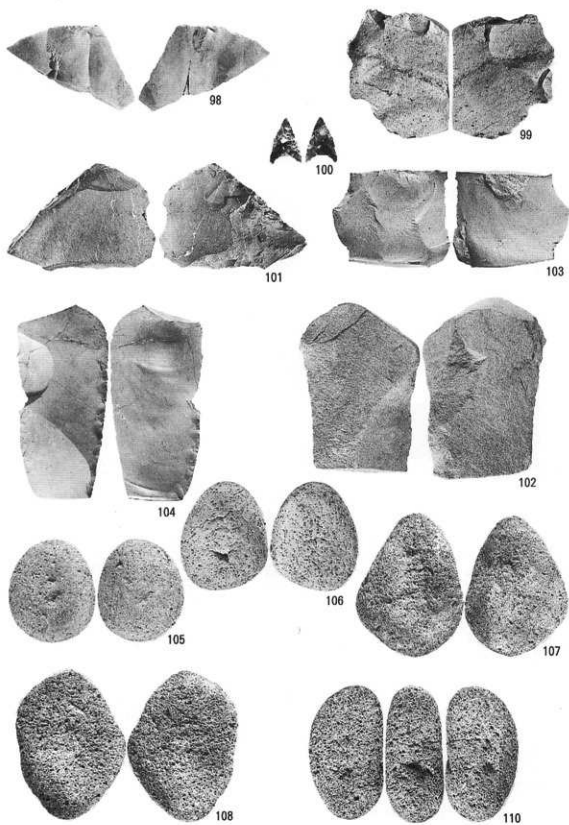
写真図版17 遺構外出土遺物(2)



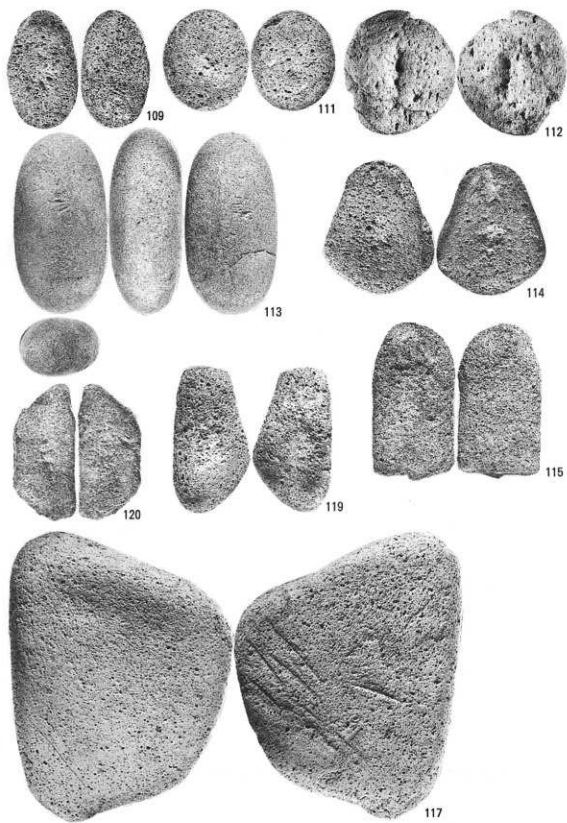
写真図版18 遺構外出土遺物（3）



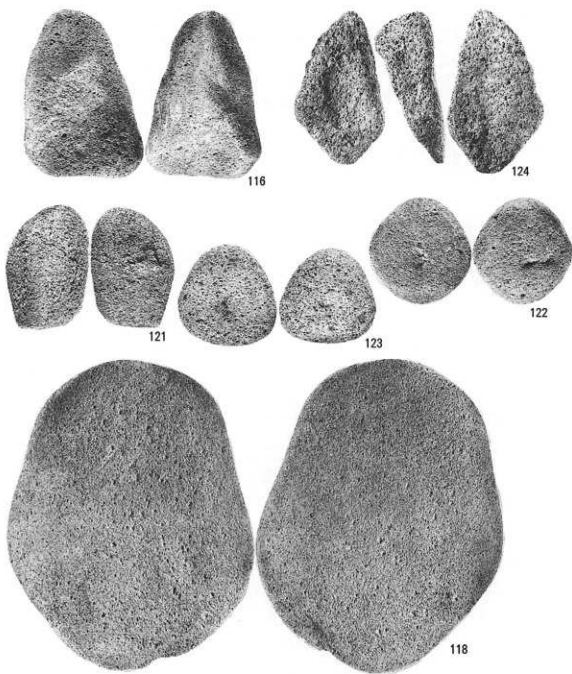
写真図版19 遺構外出土遺物(4)



写真図版20 遺構外出土遺物(5)



写真図版21 遺構外出土遺物（6）



写真図版22 遺構外出土遺物（7）

Ⅶ. 付編

大清水遺跡出土火山灰の分析・鑑定

目次

1. はじめに
2. 試料
3. 分析方法
 - (1) テフラ分析
 - (2) 屈折率測定
4. 結果
 - (1) テフラ分析
 - (2) 屈折率測定
5. テフラの対比

図・写真図版

図1 大清水遺跡の火山ガラスの屈折率

写真図版1 大清水遺跡のテフラ

大清水遺跡の火山灰について

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

大清水遺跡は北上川右岸に広がる胆沢扇状地の扇端部に立地している。遺跡の発掘調査では、縄文時代と推定される土坑が検出されており、土坑覆土中には火山灰とみられる土層が認められた。今回の分析調査では、これらの土層が火山噴出物（いわゆるテフラ）に由来するものであるかを検証し、テフラであればその特定を行う（テフラ分析）。また試料に火山ガラスが含まれている場合、より確実にテフラの対比を行うために、火山ガラスの屈折率を測定する。

これらの結果から、検出された土坑の構築年代や埋没年代に関する資料を得る。

2. 試料

分析対象とする試料は、縄文時代と推定されている7号土坑の覆土1層より採取された1点である。試料は、暗褐色土の中に黄褐色粒の混じる細砂質土である。

3. 分析方法

(1) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする

(2) 屈折率測定

テフラ分析用に洗い出された試料から細粒な砂分を採取し、この中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置“MAIOT”（古澤,1995）を用いて、火山ガラス80片程度を目標として計測する。

4. 結果

(1) テフラ分析

試料には火山ガラスと軽石が含まれ、スコリアは認められない。火山ガラスは中量含まれ、無色透明の軽石型が最も多く、次いで無色透明のバブル型が多く認められる。軽石型の火山ガラスでは纖維束状のものが多く認められる。

軽石は多量に含まれており、透明がかった白色を呈し、発泡がやや良好～やや不良であるものが認められる。

(2) 屈折率測定

測定結果を図1に示す。火山ガラスの屈折率は、1.5051-1.5089である。屈折率1.507付近にピークがあり、狭い範囲に集中して認められる。

5. テフラの対比

今回認められた軽石と火山ガラスは、その形態と火山ガラスの屈折率、遺跡の地理的位置、町田ほか(1981)および町田・新井(1992)等の記載から、十和田aテフラ(To-a; 町田ほか, 1981)に由来すると考えられる。To-aはA.D.915年に十和田カルデラより噴出したとされ、給源から南方の東北地方一帯に広く分布している(町田・新井, 1992)。To-aに含まれる火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)では1.449-1.504と記載されている。

7号土坑の覆土1層に含まれる砂分では、軽石および火山ガラス以外の粒子が非常に少ないことから、覆土1層はTo-aが降下堆積したものがそのまま保存されたものである可能性が高い。したがって、覆土1層はTo-aが噴出したA.D.915年に堆積したと考えられる。7号土坑覆土中の1層の詳細な位置関係は不明であるが、1層は覆土の上位とされている。したがって、To-aが噴出したA.D.915年には、この土坑の堆積は進んでいたものの、地表面で窪地状を呈していた可能性がある。

<引用文献>

古澤 明 1995. 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p. 123-133.

町田 洋・新井勇夫 1992. 『火山灰アトラス』 276p., 東京大学出版会.

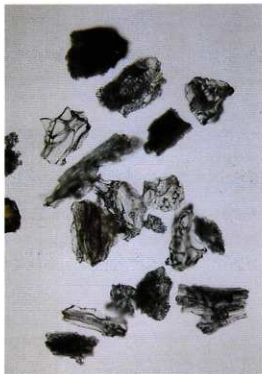
町田 洋・新井勇夫・森脇 広 1981. 日本を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p. 562-569.

図版1 大清水遺跡のテフラ



1. T o-aの軽石(7号土坑覆土1層)

1mm



2. T o-aの火山ガラス(7号土坑覆土1層)

0.5mm

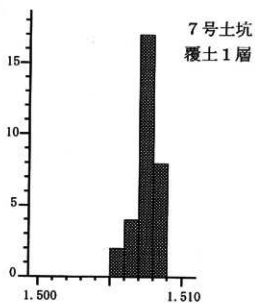


図1 大清水遺跡の火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

写真図版(付録)

報告書抄録

ふりがな	おおしみずいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	大清水遺跡発掘調査報告書							
副書名	胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 373 集							
編者名	佐藤淳一							
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019)638-9001							
発行年月日	西暦 2001 年 10 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 住 所	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおしみず いせき 大 清 水 遺 跡	いわてけんいさわ ぐんいさわちやう わかやなぎあざけ いぜん 岩手県胆沢郡胆 沢町若柳字慶存	03383	NE22-2289	39度 06分 10秒	141度 57分 30秒	2000. 4.18~11.22	9,120㎡	胆沢ダム建 設に伴う緊 急発掘調査
所収遺構名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大清水遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡 1棟 土坑 19基 陥し穴 7基 焼土 6基	縄文土器 (前期前葉～晩期) 石器・土製品		縄文時代を主な時期と する狩場 楕円形基調の陥し穴 溝状の陥し穴		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 373 集

大清水遺跡発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成 13 年 10 月 19 日

発行 平成 13 年 10 月 29 日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡 11-185

電話 (019)638-9001・9002

FAX (019)638-8563

印刷 (株) 五六堂印刷

〒020-0021 盛岡市中央通 3-16-15

電話 (019)654-5610

FAX (019)651-2167
